

協働のかたち ② ビルダーとの協働

ひろば

連載：建築生産における協業を考える 第2回

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

各支部活動報告 近畿支部

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

オンラインセミナーの舞台裏

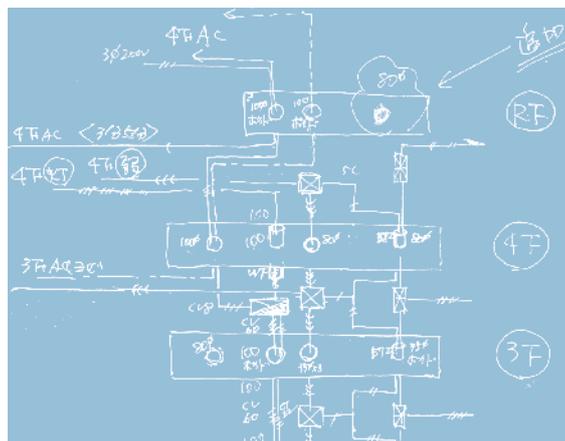
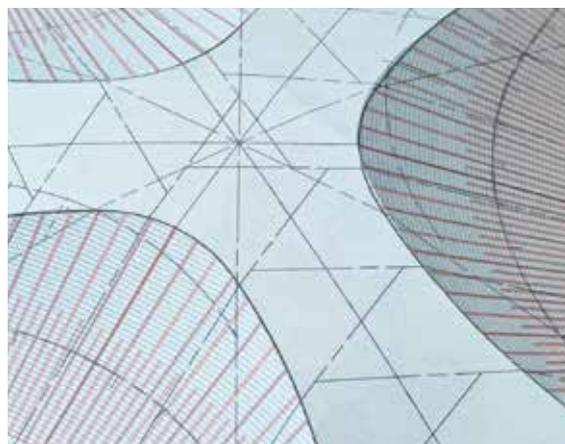
温故知新

活動報告

建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

次世代のタマゴたち





表情のある化粧シートと防滑性床材で 意匠性の高い空間を演出可能

タキロンマテックス株式会社は、タキロン株式会社(現タキロンシーアイ株式会社)が製造する製品を販売する会社として発足しました。防滑性ビニル床シートや粘着剤付き化粧フィルムなど、建築の内外装資材を国内向けに販売しています。防滑に特化した長尺シートの市場では国内トップシェアを誇り、安心・安全に加えて、デザイン性の優れた商品も数多く展開し、建築のさまざまなシーンで採用されています。タキロンマテックスのこれまでの歩みと、注力している製品について、池中功社長にお話をうかがいました。

安心・安全を第一に 塩化ビニル製の建築資材を提供

当社はタキロン株式会社(当時)が製造する建築の床材の販売部隊として2000年に発足しました。タキロン株式会社は、1919年に瀧川セルロイド工業所として大阪で創業。その後、波板など合成樹脂製の建材を扱うようになり、1973年にはプールサイド用防滑性ビニル床シート「タキストロン タフスリップタイプ」を発売しました。もともと塩化ビニル長尺シートは屋外での使用は難しいとされていましたが、材料や副資材を開発することで屋外仕様を実現し、それ以来、マンションや階段、教育施設、厨房など、安心・安全を第一に、防滑に特化した床材を提供しています。

2017年にはタキロン株式会社とシーアイ化成株式会社が経営統合してタキロンシーアイ株式会社になり、現在は塩化ビニルを主体とした床材に加え、壁などに使用する化粧フィルムも販売しています。

また、当社は公益財団法人日本水泳連盟主催の水泳大会にスポンサー協賛し、アスリートを応援しています。選手が安心して競技に臨めるよう商品の開発・製造に努め、これまでに多くの



さまざまな水泳競技大会にプールサイド用防滑性ビニル床シート「タキストロン」が採用されています

水泳競技大会で当社の床材が選ばれています。

単色にテクスチャーをプラスした 表情のある化粧材

粘着剤付き化粧フィルム「belbien」は、原料配合から印刷まで一貫して国内の自社工場生産しており、品質に加え、デザイン性、耐久性、耐水性に優れた化粧材です。集合住宅や商業施設、医療・福祉施設の内外装など、さまざまな用途に対応したシリーズを豊富な色柄で取り揃えています。

表面に凹凸を施すエンボスの技術で天然木の質感を表現した「belbienWR」や、耐候性の高い「belbienEX」、また、新柄の「belbien+TEX」は単色シートですが、細かなエンボスを施すことで、陰影や表情をつくり出し空間を演出します。2021年4月の新商品として抗菌・抗ウイルスタイプもご用意しています。

意匠性とメンテナンス性に優れた 防滑性ビニル床シート

防滑性ビニル床シート「タキストロン」は、滑りにくいように表面に凹凸のエンボスを施し、適度にクッション性のある安全性の高い長尺床材です。耐水性と耐候性にも優れているため、屋外施設にも使用でき、摩擦しても同じ色や柄が残るインレイド構造が特徴。

さらに近年、インレイド構造を進



壁にbelbien(EW1305)、床にタキストロン(PRE83)を施工した例

化させた「クリアインレイド構造」の製品「タキストロンWB」や「AHT/AHL」を販売。木目などが印刷されたデザイン層の上に、耐候性の高い透明な樹脂を重ねることで、従来の機能に加え、意匠性とメンテナンス性に優れた床材を実現させました。

その他、抗ウイルス性を付与したトイレ用床材「ネオクリーン」や、遮音・防滑性階段用床材「タキステップ」も販売。また床材に階数やサインを施す「アートカット」も受注生産しています。特注幅や特注色にも対応しています。

台風や豪雨などの浸水被害から 大切な資産を守る止水板

女性やお年寄りでも持ち運びができる軽量パネル簡易式止水板「フラッドセーフライト」1段タイプ、2段タイプもご用意しています。2019年11月制定のJIS A 4716に定める漏水量の等級において、最高等級の「WS-6」相当に該当します(1段タイプ:水深500mm対応)。

ぜひお気軽にお問い合わせください。



目次

2021年度支部長挨拶

- 4 “見直すこと” “新たなこと” への取り組み アトリエ慶野正司 一級建築士事務所 慶野正司

● 特集

5 協働のかたち ②

ビルダーとの協働

インタビュー：フラットに意見し合える現場を目指して

参加者	初谷 仁	大和工務店／現場監督
	富永 茂	トミデンコンス／電気設備工事
	新井勇司	新井建築板金／板金職人
聞き手	関本竜太	「Bulletin」編集長／リオタデザイン 「Bulletin」WGメンバー

● ひろば

- 12 連載：建築生産における協業を考える 第2回
日米の設計分業の違いについて 小笠原正豊建築設計事務所／東京電機大学 小笠原正豊
- 14 interview：覗いてみました他人の流儀
廣瀬智央氏に聞く 多様で複雑な世界を感じたままアートで表現する Bulletin編集WG
- 16 海外レポート 第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展レポート 宮内智久建築都市研究所 宮内智久
- 18 各支部活動報告
近畿支部 大学院生を中心とした学生委員会 通称「HAZAMA LAB.」を設立 奈良女子大学大学院 岡本典子
- 20 未来へ継承したい風景
残したい地域の歴史・風景 一城東地域エリアの景観・歴史・環境遺産— 久米設計 小川成洋
- 22 良質な建築、これからのまちづくり
専門性と総合性のコミュニケーションが生む「いい建築」 山本想太郎設計アトリエ 山本想太郎
- 23 オンラインセミナーの舞台裏
「小住宅こそオンライン見学会」part1 一企画から事前収録と編集まで— タジュール 中村雅子
- 24 温故知新 異文化を通して見えてきたこと 佐藤尚巳建築研究所 佐藤尚巳
- 25 抱負を語る 住宅建築家への道 一級建築士事務所 アトリエ カマイ 井野勇志
- 抱負を語る 多拠点で設計する 一都市の形を考える— 伊藤立平建築設計事務所 伊藤立平
- 26 活動報告 交流委員会 オンライン技術セミナー開催 一第4回から第7回の報告— 蒼設備設計 相野谷誠志
- 28 建築ウォームアップ 一建築のはじまりかたを探る—
長年培った施主との交流が財産 アクト建築設計事務所 代田正司
- 29 卒業設計をふりかえる 忘れていた原点 井上洋介建築研究所 井上洋介
- 30 次世代のタマゴたち
コロナとデザイン 建築の本質を見つめなおす 芝浦工業大学建築学部建築学科 井筒悠斗
- 地域に学び 地域に返す
- 宇都宮大学大学院 寺澤基輝
- あとがき
- 31 ひといき 蘇ったうさぎたち RABBITSON 一級建築士事務所 倉島和弥
- 31 編集後記／「Bulletin」バックナンバー Web公開

2 パートナーズアイ

タキロンマテックス株式会社 表情のある化粧シートと防滑性床材で 意匠性の高い空間を演出可能

表紙画像：上、「梅郷礼拝堂」（設計：加藤建築設計事務所）屋根の紙モデル 提供 新井建築板金／下、電気系統図 提供 トミデンコンス

“見直すこと” “新たなこと”への取り組み



関東甲信越支部
支部長
慶野正司

関東甲信越支部会員の皆さま、こんにちは。支部長を務めております慶野正司です。

昨年度を振り返りますと、新型コロナ蔓延により困惑の渦中でスタートし、行動変容が求められ続けるなか活動の方法を模索し続けた1年でした。そして、とうとう1年間皆様とリアルにお会いできる機会も設けられず、誠に残念に思います。そのなか、支部内の23地域会、17委員会、12部会、2支部事業においては、当初計画の通りとはいかないまでも数々の成果をあげられました。JIA活動を止めないという強い意志でご尽力いただきました皆様に敬意を表し、御礼申し上げます。

支部の執行部を預かる常任幹事会では、支部の活動方針に沿って重点課題を検討・推進する以下のWGを常任幹事会内に設置し、活動してまいりました。

- 建築家職能を考え発信する課題
(発注者支援WG、資格制度勉強会WG)
- 会員の交流・連携を推進する課題
(委員会懇談会WG、法人協力会員技術セミナーWG)
- JIAの次世代を考える課題
(学生会員フォローWG)

これらは、関連する委員会(会議体)と連携しながら活動しており、少しずつ成果も表れてきています。特に支部内の交流を深めることを課題とするWGのなかで、「委員会懇談会WG」は各委員会に伺い委員会活動の現状や今後の課題など情報共有することを目的とし、管理系委員会を除く15委員会+1支部事業実行委員会を対象に実施いたしました。活動の相互理解を深めることによるさらなる活性化が期待されます。また「法人協力会員技術セミナーWG」では交流委員会と連携し、法人協力会員の製品紹介(PR)を通して持てる企業ノウハウを設計に携わる正会員に提供する企画として、「JIAオンライン技術セミナー」を立ち上げ連続開催いたしました。これは過去の交流が十分ではなかったとの反省からの企画であり、JIA活動を支えてくださる法人協力会員と正会員の新たな交流機会となりました。企業PRと設計技

術向上を目的とし、相互にwin-winの関係を築く試みであり継続的な開催に期待を寄せています。

そして特に大きく前進したのが「学生会員フォローWG」です。昨年度本部事業として実施したコロナ禍における困窮学生支援をきっかけに、大勢の学生会員が誕生いたしました。そもそも今まで学生会員にフォーカスした活動が乏しかったなか、積極的に情報提供し、JIA会員であるインセンティブを実感できるようフォローしてまいりました。その結果、学生会員間の連携も生まれ、自主能動的な活動体が緩やかながら組織されてきました。そして学生会員の入会手続きを簡素化したこともあり、現在入会者数も増加しつつあります。言うまでもなく建築設計界の将来を担い、JIAの未来を託す学生会員の輪が広がり活性化することは重要であり、長期的な視野に立ち引き続き活動を支援してまいります。

さて、本年度も依然収束をみないコロナ禍でスタートいたしました。たびたび言われることですが、私たちはこの1年間のオンライン活用の経験でその有能性を学習しリテラシーを高めてまいりました。それによりアフターコロナにおいても活動のオンライン・リモート化は活性化のための効果的なツールとして捉えており、会員共通の認識でもあると思います。このように新たなツールを得ることで、より一層広がりのある活動が可能となり、社会への発信力を高め、全国単一会の利点を活かすことにもつながります。これは過去より重ねて議論してきた活動の“あり方”を見出す機会でもあり、コロナ禍によりさまざまな社会変容が起きつつあるなか、正に今がその好機であるといえます。会員増強や会員交流および活動連携、社会発信や建築家職能などなど、JIAが抱えているたくさんの課題、またSDGsやパンデミックで浮上している新しい時代に呼応した課題など、活動や運営において慣例にとらわれることなく“見直すこと”“新たなこと”に意欲的に取り組んでまいりたいと思います。

1年間、会員の皆様のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2021年度テーマ

協働のかたち 2

ビルダーとの協働

インタビュー

フラットに意見し合える 現場を目指して

参加者	初谷 仁	大和工務店／現場監督
	富永 茂	トミデンコンス／電気設備工事
	新井勇司	新井建築板金／板金職人
聞き手	関本竜太	『Bulletin』編集長／リオタデザイン 『Bulletin』WGメンバー



左から、富永 茂さん、初谷 仁さん、新井勇司さん、関本竜太編集長
(撮影時のみマスクを外しています。以下同様)

2021年度特集「協働のかたち」第2回目は「ビルダーとの協働」がテーマです。施工に携わる初谷 仁さん（工務店）、富永 茂さん（電気設備）、新井勇司さん（板金）に、建築家が設計した現場での作業についてや、普段心がけておられること、また建築家との協働で思うことなどをお話いただきました。

施工現場での役割

関本 皆さんは同じ物件を担当することもあるそうですが、まずはそれぞれどんな仕事をされているのかお話しいただけますか。

初谷 工務店 大和工務店の初谷と申します。会社は江戸川区にあり、施工専業で木造建築を中心に戸建てや中規模木造を手がけています。江戸時代の後期に創業して以来、江戸川区を中心に23区エリアで建築工事を行っています。

富永 電気設備 トミデンコンスの富永です。当社は電気設備工事がメインですが、換気・空調設備工事や防災設備、防犯設備などの弱電設備工事も行っています。仕事は、7～8割が木造です。その他に工場やテナントの電気設備工事や空調設備工事も行っています。

会社は大和工務店と同じく江戸川区にあって、社員は私以外に3名、あと外注扱いで3名います。常時その6名で動いています。電気工事は追われ仕事、追っかけ仕事で、10人くらいで現場に入ることもあれば、大工さ

んなどのペースに合わせて1、2名で細かく入ることもあります。

関本 空調設備工事もやられるということは、ダクト工事も請け負うということでしょうか。

富永 電気設備 はい。換気とエアコンのダクト工事も行います。元請けの工務店によっては、電気も空調も一式で依頼してくれます。業務用のエアコンは普通の電気工事業者だと絶対にできませんが、受けられるというところが当社の強みです。

それから、空調、ダクト、防災工事などを行う専門業者は木造が不慣れなことが多いです。RC造や鉄骨造は施工工程がわかりやすいので設備工事も計画しやすいのですが、木造の工程はあつてないようなものなので、経験がないとどの段階で何をすればいいのかわかりません。

初谷 工務店 建築家案件や中規模木造だと、住宅用機器だけではなく業務用エアコンや消防設備等の設置を求められます。木造建築の段取りを熟知し、かつ換気空調消防設備の工事を一式行っていただけるので、弊社にとってトミデンさんはなくてはならない存在です。



「まちのこども園代々木公園」上棟風景
(設計：ブルースタジオ、施工：大和工務店)



木造住宅現場を指揮する初谷仁氏



レーザーを使ってペンダントライトを設置
(大和工務店)

関本 新井さんの仕事についても教えてください。

新井 板金 私は埼玉県で板金の仕事をしています。住宅が主で、9割くらいが建築家の案件です。既製品は使わずにすべて平板からつくることが多く、屋根の成型機も縦ハゼ葺き、横葺き、ベンダーの長いものなど、建築家オリジナルの要求にに応じて仕事をしています。

関本 仕事の9割が建築家の案件になった背景を教えてください。

新井 板金 もともと父が板金をしていたのですが、私は同じ板金でも建築家と一緒にオンリーワンのものをつくりたいという気持ちが強くて、大学は建築科を卒業して、一級建築士資格も取りました。最初は工務店からの仕事ばかりで、サイディングなども扱っていましたが、やはり自分できちんとつくりたいと思い、10年くらいかけて完全に板金だけにシフトしていきました。

今では建築家の方に指名していただくことが多くなり、仕事はすごく楽しいです。朝早く家を出て、帰ってから次の日のために加工して準備をするのですが、全然苦になりません。1枚の板に命を与えているようで面白いです。

関本 初谷さんや富永さんも建築家との仕事が多いのでしょうか。

初谷 工務店 そうですね。8割近くが設計事務所からの請負仕事です。

富永 電気設備 うちも8割は建築家の案件で、建て売りはありません。



初谷 仁さん
(大和工務店)

建築家案件におけるやりがい

関本 建築家はこだわりも多く、施工で苦勞する場面も多いと思いますが、建築家の案件に携わることをどのようにお考えですか。

初谷 工務店 私は建築を通じて、人のためになる仕事をしたいという思いがあります。また、建築家による設計監理、施工、クライアントという独立した三権によるかたちは、いろいろな建築形態がある中で、最もクライアントがハッピーになる形態であると信じています。われわれ技術屋は営業のことはあまり考えず、仕事に没頭してつくり続けることが大事で、その結果、紹介など新たな仕事につながります。建築家の案件は難しいことも多々ありますが、学ぶことも多く、やりがいを感じていますし、一生懸命つくったものは必ず誰かが見てくれるだろうと思ってやっています。

富永 電気設備 建築家との仕事は正直手間が多いですが、それをいかに効率よくやるかが面白いところだということも確かです。手の掛かる作業をひたすら時間とお金をかけてやるのは誰でもできると思います。しかしそれを面倒と思うのではなく、3日間くらいかかるような仕事を、1日で終わらせるのが僕らのような職人のやりがいではないでしょうか。

それから、手がけている建築物は商品だと思っていません。ハウスメーカーなどの建て売りは一般的にも商品として扱われていますが、僕らが関わる建物は、使う人と設計する人がいて、その使う人の生活スタイルを考えながら設計されています。その人のためにつくっているのだから商品ではありません。そこが建築家が設計した建物とそうでない建物の違いだと思います。使う人の顔や生活スタイルなどが見えた方が、作業しながら気づいたことを伝えられたりしますし、そういう部分に手応えを感じながら仕事をしています。

それからすごく苦勞して夜遅くまでかかった現場でも、完成した姿を冷静に見て、「かつこいいものができたね」と仲間と話すことができる案件が多いのも嬉しいです。

新井 板金 僕たちには扱うものごとに標準施工要領があって、メーカーからの製品も含め作業の仕方が決まっています。しかし、建築家の皆さんは建物全体を俯瞰的に見ているので、「こういうふうにもできるんじゃない？」と、僕たちが思い付かないような提案をしてくれることがあります。例えば縦ハゼ葺きの外壁の時に、ある建築家の方が通常のパターンではなく、こういうふうにはできないかと紙でつくって提案してきました。それは20年くらい前のことですが、この間メンテナンスに行ったら何も問題なく状態もきれいなままでした。

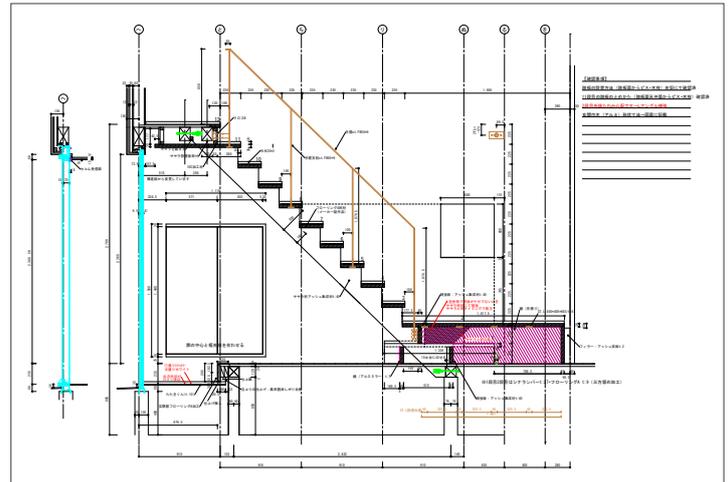
それから、建築家の現場には業者も一流の方が集まってきます。ですからこちらも学ぶことや刺激を受けることが多く、そういう出会いは大切ですし、僕にとってメリットだと感じています。

建築家はプロジェクトパートナー

関本 建築家の現場でとくに意識していることはありますか。

初谷 工務店 私は建築家の方を特別扱いせず、プロジェクトパートナーとしてフラットな関係を構築できるよう心がけています。ですから、設計者を先生と呼んだことはありません。建築家に言いたいことを言えないようでは、いいものはできません。建築家、工務店の監督、職人、全員フラットである必要があるのです。設計者が現場監督に上からものを言うと、監督は進言しなくなる。監督が職人に上からものを言うと、職人から進言が来なくなる。これでは良いものはできません。

富永 電気設備 僕らにとっても、やはり話ができるかどうか重要なのだと思います。設計者が攻めた設計をして、配線スペースやダクトルートがほとんどなくて作業が難しくても、そうなっている意図がわかればいいと思うのです。息子さんの身長が高いからだとか、意匠的にどうしてもそうしたいなど、意図がわかればこちらも納得できます。あとは、「ここは攻めるけど、ここはEPSとして使っている」とか、「空間としての見せ場はみんなで苦労してかつこよくするけれど、バックヤードにしか使わないところは壁をふかして設備スペースとして使いたましよう」などというような、そういうメリハリがあればいいと思います。そのように、設計者の意図と僕らの言わんとしていることを話し合えばいちばんいいですね。



階段施工図(大和工務店)

いい建物をつくるためには

関本 現場でやむを得ず追加変更工事が発生することがありますよね。調整に苦労することも多いのではないのでしょうか。

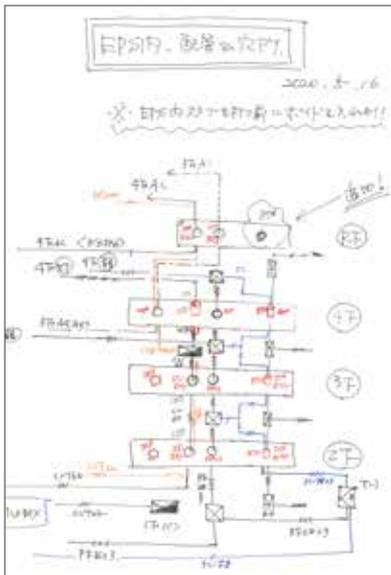
初谷 工務店 やはり施工中に大胆すぎる変更があると、必ず大きなマイナス効果が生まれてしまいます。例えば、引き戸を開き戸に変えたことで、スイッチの位置も変えなくてはいけなくなるなど……。1つ変更するとそれに連動して複数の変更が生じることが多いです。現場での思いつきではなく、設計者が実施設計中に図面上で全体を見て考えていることが、いちばん理にかなっているのではないかと思います。

富永 電気設備 僕らは現場が始まる前に図面は完成しているものと思っていて、監督も同様だと思いますが、僕らの仕事は段取りが重要で、頭を使うのは段取りが7割で作業は3割くらい。現場を進めながら、もう次の現場のことも考えながら作業していくのが職人です。そこに1箇所でも変更が入ると、作業の手が止まるだけではなく、今やったもののやり替え、さらに次をどう進めるかなど、3倍くらいの作業になってしまいます。建築家の仕事はこだわりも多く、こちらも細かくいろいろなことを考える分、そこで変更があるとすごく大変です。

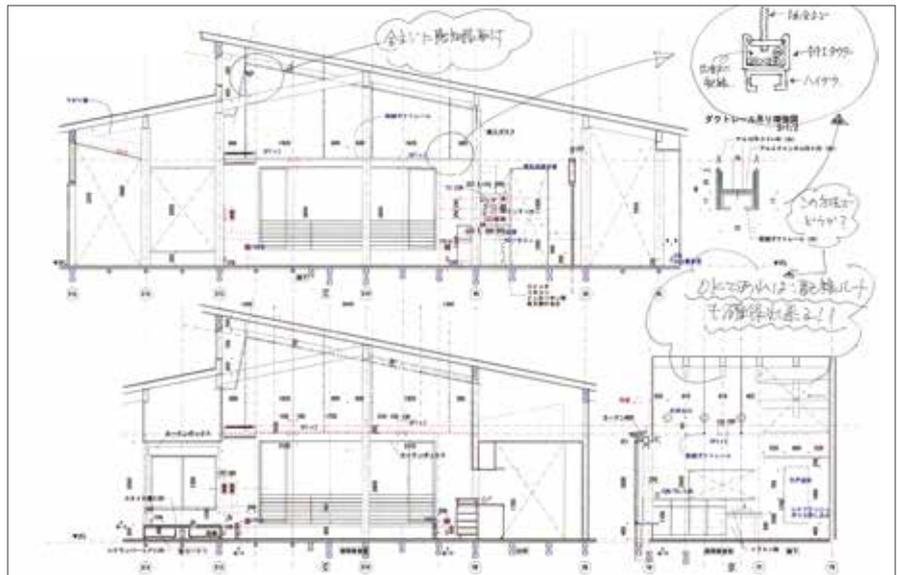
初谷 工務店 もちろんどの世界でも失敗は付きものです



富永 茂さん
(トミデンコンス)



手描きによる電気系統図(トミデンコンス)



設備関係プロットおよび変更展開図(設計:島村香子建築設計室)(トミデンコンス)

し、現場でうまくいかなかったり、施主の要望などで変更が発生するのは仕方ありません。ただそれが繰り返されると現場の空気も悪くなってしまいますので、そういう空気にならないように努めることも、いい建物をつくるためには重要なことだと思います。

新井 板金 僕は、ある現場で設計者からの要望として現場監督から「樋を端まで設けずケラバの手前で止めてほしい」と言われ、そうするとそこに水が垂れてしまうことを話しましたが、その指示通りにということ苦勞して短く詰めました。しかし引き渡した後に行くと、やはりお客さんがその部分の雨だれを気にして……。

初谷 工務店 私はそのような一般通念上おかしいことを設計者から言われて断れなかった場合は、「引き渡しの際の申し送り事項に加えますね」と言うようにしています。今の場合であれば、「意匠上短くしたことによって雨だれ音が出る恐れがあります」というように。設計者は工事中は本当に細かいところまでこだわりますが、そのあと維持管理していくのは私たちです。今の例も施工不良のように言われてしまう恐れがありますし、設計者も言ったことを忘れていた可能性もある。ですから、現場監督はこのような方法をとっていくのも自衛手段のひとつだと思います。



新井勇司さん
(新井建築板金)

お互いの意図を理解し合う

関本 現場との協働において、設計者側が嬉しく思うのは、自分の設計したものがきれいに施工されるのはもちろんですが、現場の力が設計者を超えてくるような体験するとやはり感動します。先日、スタッフが軒樋を描き忘れていて、軒樋を付けると、よりによって玄関の一番目立つところに縦樋を付けなくてはいけないことが発覚しました。仕方なく付けるようにしたら、新井さんが「でもそこには樋は付けたくないですね」と言って、軒樋を付けない特殊な屋根の葺き方をしてくれたのです。あれには驚きました。施工側が設計者の意図を汲んで、よりよいかたちに変えてくださる瞬間は一緒にやっていて嬉しいです。

新井 板金 それは関本さんと直接やり取りできる現場でしたね。

富永 電気設備 僕の場合、現場でこちらが気付いたことや提案を監督経由で設計者に伝えてもらうことはよくありますが、設計者がそれに賛同してくれてこちらの提案を採用してもらえた時は嬉しいですね。施工者としての経験を信頼し、理解してもらえた気がしました。

新井 板金 僕はある住宅で、設計を担当してくれた女性が、板金外壁のラインがあちこちで揃っていないのを見て、「わあきれい！」と言ってくれた時は「やったな」と思いました。適切な評価をいただいた時、我々職人はやる気になります。

関本 設計者は気づいたことは伝えるべきですね。施工うまくいかなかった時に、設計者とのやり取りからうまくいった、良いものになったというような経験はありますか。

富永 **電気工事** はい。床下を通すはずの配管をどうしても上から出さなくてはいけないという時に、隠すためのDSを意匠の飾りにして仕上げてもらったり、この間も天井に埋めなくてはいけない換気扇がどうやっても収まらなくなってしまったのですが、設計者がそこに吊り戸棚のようなものを取り付けて、その戸棚の下に換気扇を入れてつくり替えてくれました。現場にいたみんなで考えつくりましたが、結局はその方が換気扇が火元から近くなって、煙も吸えるから良かったということでした。

関本 そういうことによって現場がひとつにまとまる瞬間もありますよね。

新井 **板金** 竣工後のことになりますが、設計者が施主に丁寧に板金の説明をしてくださり、見えない場所ですが、実はいろいろな細工があるということを理解してもらえ、こともとても嬉しいです。

関本 苦労したエピソードを話すと、施主は「そんなに苦労してくださったんですね」と喜びます。ですから施工のエピソードやこだわりなどはもう少し施主と共有されるべきかもしれません。

専門業者だから気付くこと

関本 富永さんの配線やダクトは天井の中に収まってしまっているので、フタをしてしまえば見えませんが、やはりこだわりがあるのでしょうか。

富永 **電気設備** こだわりは人それぞれにあります。そこがスピード重視の場所なのか、きちんと丁寧につくらなければいけない場所なのか、その判断は常に気をつけながらやっています。10年後20年後に天井を開いても、自分が担当したところかどうか、電気工事屋は誰でもわかると思いますよ。

関本 現場で照明やコンセントを追加で付けたいことがあったとして、私としてはもう無理だと思っても、現場の方は「なんとかかなと思います」と言って、壁にキズひとつ付けずに配線作業してくれることがあります。

富永 **電気設備** それは業者によってできる場合とできない

場合があると思います。うちの場合は、建築家の案件は施工中の変更が多いので、あらかじめ予測してどこかに必ず保険を残しています。我々のような職人は、現場を見るといろいろなことに気づくのです。「ここはどう考えても暗いな、後で照明を追加しようだな」というように。そういうところには近くに電源を用意しておくような保険を残しています。それで案の定「照明を増やしたい」と言われると、「すごい大変なんですよ」と言いながら工事は10分で終わってしまうというようなことはあります(笑)。

初谷 **工務店** 監督としては、そういった場合の追加費用は最小限に収めたいので、専門業者が気づいたことがあればできるだけ早く言ってきてもらえるように、意見を汲み取りやすい環境を構築しておくことが大切です。

富永 **電気設備** これは人それぞれだと思いますが、僕はそのような照明の不足などに気付くためにも、施主がどんな家族構成か聞くようにしています。そうでないとどこを意識して作業すればいいのかわかりません。何人で住まわれるのか、お子さんはどれくらいの年齢なのか、それによって電気の容量が計算できます。エアコンが5台付いていても、2人暮らしだったら同時に使用するのは1台か2台。そこに子どもが2人いればプラス2台同時に回る。そうすると、5台のうち同時使用は4台だとか。若い女の子がいればドライヤーも関わってきます。ですから家族構成はできれば先に知りたいです。

関本 家族構成を共有することで施工者側のつくり方も変わってくるのですね。とても興味深いお話です。

初谷 **工務店** 私は施主の職業が知りたいです。職業によって許容値が違う傾向があります。例えば自営業の方だとある程度大らかな方が多いような気がしますが、大きい会社にお勤めの方には業務連絡の言葉遣いにも気をつけたりします。そういうオーダーメイドの接客をすることが、アフターケアやトラブルシューティングには重要だと思っています。

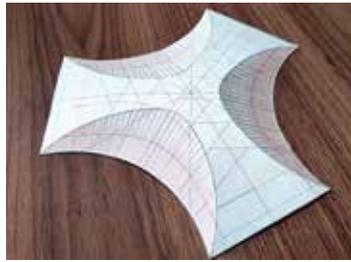
常に勉強し続けるプロ意識

関本 新井さんは建築家との案件で難しいことをたくさんやってきたと思います。これまでで一番大変だった仕事はどのようなものですか。

新井 **板金** ひとつひとつ全部大変です。でもその積み重



「梅郷礼拝堂」(設計：加藤建築設計事務所、板金：新井建築板金)



屋根の紙モデル(製作：加藤建築設計事務所)



防水用巻きハゼ大板施工中の様子。この上に吊子をハンダ付け平葺き

ねで自分の引き出しが増えていくのですから面白いです。

例えば、千葉県野田市にある「梅郷礼拝堂」は平葺きなのですが、勾配がなくなったところから銅板1枚で葺き、その上の平葺きはあくまで化粧で、下で防水をとるようにしました。僕ははじめは「ゼロ勾配では葺けないからできない」と言ったのですが、建築家の方が「神社やお寺の反っている屋根は二重になっているですよ」と教えてくださいました。それで平葺きの吊子に釘を打つ代わりに、はんだで留めることにしました。釘を使うと穴が空いてしまいますから防水はとれないので、3尺×5mの平板4枚を繋いだ大きな板の上に化粧の平葺きを施工しました。

関本 普通の板金屋は窓まわりの取り合いなどに役物を回しますが、新井さんはあまりそういうことはしませんね。「雨は中に入るという前提で、どう抜くかを考える」という考え方は目からうろこでした。やはり雨は多少なりとも板金の後ろに回るということを前提に納まりを考えているのでしょうか。

新井 **板金** そうですね。窓など開口部は、コーキングしない限り水が入らないようにするのは無理です。ですから、伝わってきた水を上で処理するのか、下に出口をつくるのか、また、壁材本体ではなくその下に1枚サポートを入れておくのか。水は上から下に素直に流れるので、その道をつくってあげるということが大切なのではないかと思います。

関本 コーキングに頼ること自体が、防水のイロハから外れているわけですね。

新井 **板金** そうですね。コーキングはいつか切れますから。私は埼玉県の板金工業組合に所属していますが、組合ではいろいろな実験をしています。今は長期暴露で屋根やビスの変化を観察していて、以前には、屋根の雨音を抑えるにはどういう製品の組み合わせがいいのかを調べたりしました。

面白かったのが、軒先の納め方の実験です。通常軒先は下ハゼを18mmにすると、上ハゼを15mmにして3mm短くするように教わってきました。でもなぜそうするのかは誰もわからなかった。なので実験してみたら、

同じ長さだと水が上がってしまい、3mmずれていると水が切れることが確認できました。昔からの教えは正しかった。こういうことを実験を通して確認し、全国の仲間に伝えるとともに、本質を理解することで、自由な発想に対応することができると思っています。

全員で経済設計を目指すには

関本 建築家との協働において、もっとこうできればと思うようなことはありますか。

初谷 **工務店** 住宅規模だと関係者が限定されていて、みんな同じルーティンの中でやっているの、あまりトラブルは起きないのですが、非住宅で、ある一定規模以上の設備設計者が入る案件になるとトラブルの量が増えていきます。

設備設計者はコストよりも、管の口径や電気の容量などにおいて安全設計をされる傾向があるように思います。それに対して意匠設計者はコストをまとめる必要があります。そういう時に富永さんが「この電気容量は多すぎませんか」などと言ってくれることもあります。

富永 **電気設備** 設備設計者は、これくらいの大きさの箱に対してどれくらいの電気容量が必要かをフルスペックで考えていることもあるので、それだと予算的に合わない場合はコストダウンのためにVE提案をすることになります。そうすると何かあった時の責任を全て負うことになりリスクはあるのですが、やはりそこはオーバースペックではなく適正な金額にしたいと考えています。それを監督が設計者に伝えて、VE提案をしても運用的に何も問題がないことがわかると、みんながいい方向に進み、Win-Winになれるのです。

初谷 **工務店** 意匠設計者の多くは減額したい時に、水栓の仕様や壁紙など、目に見えるところから下げようと思いますが、その前に設備は目に見えない減額要素が多くあるように感じます。設備設計者は意匠設計者と同じ設計サイドなので、交渉などしづらい面があるのかもしれない



窓廻りの板金を繊細に納める新井勇司氏

せんね。我々は皆で経済設計を目指したいのですが、意匠設計と設備設計のコミュニケーションがもう少し取れていればと思うことがあります。

関本 設計側が経済合理性を共有できていないことがあるということですね。

初谷 **工務店** 例えば、114条区画という避難用の界壁がある建物で、その区画を貫通する排水管の口径が100φ以上になると耐火二層管を使わなくてはならず、一般的なVP管より高価になってしまいます。それを75φに抑えると耐火二層管を使う必要がなくなり、大きくコストが下がります。そういうことを我々施工者が検討することもあります。

それから、意匠設計者が設備の詳細をそこまで把握できていないケースもあり、例えば設備設計者が意匠を気にせず、玄関に入って正面の目立つ場所にビルトインエアコンの吸い込み口を描いたとします。おそらく空調効率がいいのでしょうか。そうすると意匠設計者がそこに吸い込み口があるのは格好よくないからずらしてほしいと言う。そのようなことが現場着工後に発生すると、現場が混乱する恐れがあります。本来、ビルトインエアコンは、フィルター掃除や10年後の交換も視野に入れた位置に設置しなくてはいけないのですが、メンテナンスよりデザインが優先されることもあるようです。

このように、コストやメンテナンスのことも協働の中できちんと考えて、一緒につくっていけると良いのではないのでしょうか。

関本 我々にはない能力の持ち主とタッグを組むことで、設計したものが2倍、3倍に価値のあるものになるならば、お互いフラットにお付き合いし、同じ目線で同じ目標に向かっていきたいものですね。そのためには現場側からも忌憚なく設計者に進言すべきだし、設計者はそれを精査のうえ、謙虚に聞き入れて前向きに現場を遂行していく。そういう姿勢が問われるのだなと思いました。本日は貴重はお話をありがとうございました。

インタビュー：2021年6月29日 大和工務店にて

参加者プロフィール



初谷 仁 (はつや ひとし)

株式会社大和工務店 専務取締役

1971年東京都生まれ。1994年桜美林大学経済学部卒業。1995年中央工学校夜間建築課卒業。1995～2009年輸入建材商社勤務。2009年～大和工務店勤務、現在に至る。



富永 茂 (とみなが しげる)

TOMIDEN CONS株式会社 代表取締役

東京都立東高等学校卒。東芝大津研修センター卒業。富永電機株式会社に20年勤務後、TOMIDENとして個人事業設立。2008年TOMIDEN CONS株式会社設立、現在に至る。



新井 勇司 (あらい ゆうじ)

有限会社新井建築板金 代表取締役

芝浦工業大学建築工学科卒業。一級建築士・一級建築板金技能士。埼玉県板金工業組合理事。2006年国土交通大臣顕彰(建設マスター表彰)。多くの建築家とともに板金の可能性を追求している。

インタビューをふりかえって

我々は設計した建物を自ら施工することはできず、必ず施工者(ビルダー)の手が必要になります。ところが建物が竣工すれば、その成果の代弁者は設計者が担うことがほとんどです。本号ではそんな日頃スポットの当たらない施工側(監督・職人)の声を拾い上げ、彼らがどんなことを考え、また感じながら仕事をしているのかをお聞きしたいと思いました。

一般的に、我々の案件は手間がかかり、特殊な施工が要求されることも多々あります。そんな案件に携わる施工者にとって果たしてメリットはあるのか?そんな問いかけに対し、初谷氏は「学びがあり、必ず誰かが見てくれる」と語り、富永氏は「イレギュラーな施工を段取りよく遂行することにやりがいを感じる」と言います。また新井氏は「建築家の現場には一流の職人が集まり、切磋琢磨に刺激をもらう」ともおっしゃっていました。建売住宅のような現場と異なり、その都度難しい判断や新しい技術が求められる建築家の現場は、ある意味選りすぐりのアスリートが集うオリンピックのような場なのかもしれません。

その中でも印象的だったのは、初谷氏の「建築家を特別扱いせず、プロジェクトパートナーとして接したい」という発言でした。また監督と職人との関係においても、上からものを言うとは職人から進言が来なくなるとも。

我々は監理者として、現場に間違いや不具合があれば直ちにそれを指摘すべき立場にありますが、逆に現場から見て、それが明らかにおかしい設計仕様である場合は、それもまた躊躇わずに進言してもらうことで我々も誤りに気づくことができ、トラブルを未然に防ぐことができます。現場においても大切なことは、お互いの立場を超えて「良い建物をつくる」という一つの目標に向かってフラットで風通しの良い人間関係を築くことなのでしょう。現場からのポジティブな発言の数々に大いに勇気づけられたインタビューでした。

(『Bulletin』編集長 関本竜太)

日米の設計分業の違いについて



小笠原正豊

連載第1回目(前号)では「分業に基づく協業」について役割・責任に着目して説明しました。本稿ではもう少し具体的に、日米の社会システムの違いに起因する両国の設計分業の違いについてお話ししたいと思います。

オープンシステムとクローズドシステム

戦後の工業化によりさまざまな建築部品のプレファブリケーションが進むなか、1970年代に内田祥哉^{よしか}は「建築生産の分野では、建物全体を造るシステムをトータルシステムとしてとらえ、その部分を生産するシステムを、サブシステムとしてとらえる。(中略)オープン化されたサブシステムを集めてトータルシステムを構成することをオープンシステム^(注1)という」として建築物に対する構法的分析を試みています。例えば、乾電池のように互換性のある交換可能な既製品をオープン部品とする一方、自動車の扉のように他社と互換性のない純正部品をクローズド部品として対比します。『「形としてまとまっていること」と「仕事としてまとまっていること」とは、それぞれオープン化の必要条件^(注2)である』として、部品のように実体を伴う“モノ”に限定せず、業務・契約範囲・生産組織などについても分析を試みています。



部品化・量産化されたサブシステムとしてRC躯体に運び込まれた設備コア

モジュラー型とインテグラル型

経済学者の藤本隆宏は、機能と部品(モジュール)との関係性に着目し、モジュラー(組み合わせ)型、インテグラル(擦り合わせ)型という2つの型を提唱^(注3)しています。モジュラー型の製品の代表例はPC(パーソナルコンピュータ)です。CPU(演算機能)・ハードディスクドライブ(記憶機能)・電源ユニット(電源供給機能)などのモジュールがそれぞれ自己完結型の機能を持ち、それらを事後的に組み合わせることによってPCという製

品(システム)が成立します。一方、インテグラル型の製品として自動車が挙げられます。サスペンション・ボディ・エンジンなどの部品の間で設計パラメータが非常にきめ細かく相互調整されることによって、高い燃費や走行安定性が実現します。自動車では、サスペンションやボディやエンジンといった各部品をPCのように他社製品に入れ替えて使用することはできません。



PCではCPU・ハードディスクドライブ・電源ユニット等の各部品は自己完結型の機能を持ち、他社製品との入れ替え可能

藤本はさらに、オープンとクローズドの違いを複数企業間の連携関係ととらえ、モジュラー(組み合わせ)型、インテグラル(擦り合わせ)型と合わせてマトリクス状に表現しています。クローズド・インテグラル型とオープン・モジュラー型の対比は、建築生産を対象として70年代に内田が指摘した内容と重なることも多く、時代を超えてさまざまな人工物に適用可能な概念といえるでしょう。

	インテグラル (擦り合わせ)	モジュラー (組み合わせ)
(クローズド)	クローズド・インテグラル型 自動車 オートバイ 軽薄短小型家電 ゲームソフト 他	クローズド・モジュラー型 メインフレーム 工作機械 レゴ 他
(オープン)		オープン・モジュラー型 パソコン・システム パソコン本体 インターネット製品 自転車 ある種の新金融商品 他

アーキテクチャの基本タイプ(注6)

日本では、特に高度成長期において、多くの人間や企業が全員一丸となって最適設計する自動車などの製造が非常に得意とされてきました。一方アメリカでは、個々の有能な人を集合させたチームによって、モジュールを組み合わせたモノづくりが強いといわれています。自動車やPCによって説明されるクローズド・インテグラル型の日本と、オープン・モジュラー型の米国の違いは、建築物などの“モノ”のみならず人工物全般、言い換えると、“モノ”

を生み出す設計組織や設計プロセスさらには社会システム全般に対しても同様の傾向を認めることが可能です。

設計分業におけるオープン・モジュラー型の米国とクローズド・インテグラル型の日本

以前、米国と日本の組織設計事務所における設計分業体制の比較を行いました。^(注7) 米国の場合、アーキテクト・構造・設備のほか、エレベータコンサルタント (Vertical Transportation Consultant)、建築確認申請専門職 (Building Permit Expediter)、仕様書作成専門職 (Spec Writer) も存在します。プロジェクトによっては、プールや建物メンテナンス専門のコンサルタントが存在し、設計分業が細分化し、それぞれが役割・責任を持つ専門職として成立していました。

一方日本では、役割・責任が明確な専門職は米国ほど確立していません。分業が細分化していない一方で、建築士が多能工的にさまざまな設計業務を行う傾向があります。また設計に必要な情報を補完するために、将来発注を見据えた専門工事業者による無償の設計協力が発達している現状を確認しました。

また、組織設計事務所における意匠設計チームの編成状況についても調査しました。米国の場合は、設計・監理業務を通じて一貫してプロジェクトを担当していたのはわずか1~2人であり、コンセプト・実施設計・監理などの各段階に応じて専門的なアーキテクトを一度に多数参加させるという設計チーム体制を編成する傾向がありました。

一方日本の場合は、いったん設計チームを編成すると、基本設計・実施設計・監理までチーム一体となってプロジェクトを担当する傾向がありました。上記の調査同様に、建築士は多能工的にさまざまな意匠設計業務を行います。これらの調査からも、意匠設計業務内での役割・責任が細分化している点で、米国の方が日本に比べてモジュラー化が進んでいるといえます。

分業を加速させる米国の社会システム

米国では役割・責任を明確化する慣行が分業を後押ししているといえます。一例として設計責任分担表 (Design Responsibility Matrix) があります。複数の意匠設計者が協業する場合、まずプロジェクトを通じて必要となる設計業務を明確にした上で、それぞれの業務に対して、P (Prime Responsibility 主担当)、S (Support Role サポート) といった主従関係を示します。一般的には、コンセプトや方針の立案を行うデザインアーキテクトに対して、確認申請や実質的な性能を担保する設計に対して責任を持つアーキテクト・オブ・レコード (ロー

カルアーキテクト/エグゼクティブアーキテクトなどとも呼ばれる) との間で分業を行うことが多いようです。

このように役割・責任を明確にする慣行が社会全体で受け入れられていると、設計者間のみならずさまざまなステークホルダー間でも分業に基づく協業が可能となります。役割・責任が明確になると、プロジェクト担当者が途中で交代することも容易となりますが、米国において労働力が流動化しやすい (転職しやすい) のは、このような社会背景によるところも大きいのでしょうか。

XXX Project		Date			
MATRIX OF RESPONSIBILITIES					
Design Architect and Architect of Record - Core and Shell Building 1, Building 2, Building 3, Visitors Reception/Entrances, and Building XXX					
P = Prime Responsibility S = Support Role					
Design Phase / Activity	Design Architect	Architect of Record	CM	Client	
Concept Design Phase					
Client Conference	P	S			
Project Documentation Protocol	S	P			
Program of Requirements	S	S			P
Program Analysis	P	S			
Site Investigation	P	S	S	S	
Space Requirements / Relationships	P	P			P
Building and Zoning Code Analysis	S	P			
Preparation of Concept Design Documents					
Plans (Typical)	P	S			
Sections (Typical)	P	S			
Elevations (Typical)	P	S			
Preliminary Codes	P	S			
Preliminary Materials	P	S			
Coordination of Structural/Mechanical/Electrical Engineers	P	S			
Compilation of Concept Design Documents	P	S			
Costing / Budgets	S	S			P
Finalization of Changes	P	S			

設計責任分担表 (Design Responsibility Matrix) の例 (注8)

クローズド・インテグラル型のものづくりは日本の強みであり続けることができるか?

これらの調査は、2000年代のプロジェクトを対象としたものでしたが、2020年代の現在、建設業を取り巻く状況は大きく変わりつつあります。設計手法の点では、特に大規模建築物を対象として情報共有を前提としたBIM活用への試行も増えつつあるようです。また建築生産においては、職人不足が深刻化し、今後一層のプレファブリケーションを前提とせざるを得ない状況です。藤本は、「日本のものづくりで協業型の現場が生まれるようになったのは、戦後の高度成長期における人手不足の影響が大きいと考えられます」と指摘しています。お互いに支えあい協業することで戦後の発展を支えた設計・施工関係者が大量リタイアした後で、わが国においてどのように建築生産 (設計・施工) における協業を促していくかを検討することは、我々の世代にとって切実な問題です。

<注>

- 1: 内田祥哉『建築生産のオープンシステム』彰国社、1977、p.15
- 2: 内田祥哉『建築生産のオープンシステム』彰国社、1977、p.120
- 3: 内田は著書の中で、モジュールおよびモジュラーコーディネーションについて述べているが、藤本の指摘するモジュラー型は、内田によるサブシステムの考え方に近い。
- 4: 藤本隆宏『日本もの造り哲学』日本経済新聞出版、2004
- 5: Carliss Y. Baldwin, Kim B. Clark, Design Rules: The Power of Modularity
- 6: 藤本隆宏『日本もの造り哲学』日本経済新聞出版、2004、p.132
- 7: 小笠原正豊、吉田敏、野城智也「組織設計事務所における設計分業体制に関する基本的考察：日米建築プロジェクトをケーススタディ対象として」『日本建築学会計画系論文集』81(722)、991-999、2016.04
- 8: 小笠原正豊、野城智也「アーキテクト間の分業に関する基本的考察：米国建築プロジェクトにおけるMatrix of Responsibilitiesを研究対象として」『日本建築学会計画系論文集』82(738)、2029-2039、2017.08
- 9: <https://gemba-pi.jp/post-174751>

さとし
廣瀬智央 氏に聞く

多様で複雑な世界を 感じたままアートで表現する



今回お話をうかがったのは、ミラノを拠点に活動する現代美術家の廣瀬智央さん。世界各地の美術展に数多く参加され、昨年にはアーツ前橋で個展「廣瀬智央 地球はレモンのように青い」を開催。人と人がつながることで成立するコミュニケーションアートや、触覚や嗅覚など感覚を刺激するインスタレーションなど、さまざまな作品を発表されています。帰国中の廣瀬さんにご自身の作品と現代アートについてお話しいただきました。

—イタリアを拠点に活動されていますが、イタリアとの出会いから教えてください。

実は中学の頃から「ゴッドファーザー」が大好きで、当時最底辺のイタリア系移民がアメリカの中でどう生き抜いていくかが描かれた叙事詩とも言える作品がイタリアとの最初の出会いです。人間の光と闇のドラマがすべて描かれています。その後、大学ではイタリア近現代美術史が専門の先生のゼミだったのでポエティックなイタリアのアートに憧れたり、歴史が積み重なってできているイタリアの建築や美術の奥深さにも惹かれていました。

大学4年の春休みに初めてヨーロッパを旅したのですが、イタリアはもともと都市国家だったこともあり、街ごとにそれぞれ違って、複雑さと多様性に興奮しました。そしてごはんも美味しい！もし大学を出て美術を研究するならイタリアがいいなと直感で思いました。

—大学卒業後にイタリアに留学されたのですね。

はい。大学院には落ちてしまったのですが、大学の研究室で助手のようなことをしながらイタリア語を勉強し、イタリアの国費留学の試験に受かり、ミラノの美術大学に行くことになりました。ビザの関係で2年間で帰国しなくてはならなかったのですが、他の奨学金を受けて結局6年間通い、学位をもらって卒業しました。

卒業後はイタリアの建築会社と日本のインテリア会社の間に入ってやり取りを手伝うことになり、労働ビザを得てなんとか在留することができました。給料はなしという条件だったのですが、たまたま『FIGARO』という雑誌の副編集長が同級生だったこともあって、イタリアの食材を紹介する頁を担当させてもらえることになりました。6年契約で、取材を通してイタリアの食を深めることができました。他にもコーディネーターや映画の脇役なんかもやりましたね。

—留学中の経験は現在に大きく影響していますか。

日本では技術ばかりの授業でしたが、イタリアでは哲学書を読んでそれについて話したり、概念的なことを

しっかり鍛えて、自分が何をやりたいか、どういうことを表現したいのかを考える重要性を改めて学びました。もちろん技術も大切ですが、現代アートは作品の背後に潜むもの、作家が何を考えているのかを大切にします。

それから、僕の作品の原点はイタリアの食の豊かさや多様性にあります。ソレント半島を旅した時にレモン畑からレモンの匂いがして驚きました。その時の強烈な体験を表現したいと思い始めましたが、これまでアートの歴史の中で匂いがメインになる作品はあまりありませんでした。それは、西欧では、はかないものや消えてなくなってしまうものより、永遠に物自体を残していくことが大事にされているからです。日本にははかなさや精神性を感じる文化があります。例えば、伊勢神宮は20年に一度建て替えますが、伊勢神宮自体は二千年も続いている。一方イタリアではオリジナルの建築物が二千年残っていないさやだめ。それから、西欧は白黒はつきりつける文化ですが、日本は曖昧もよしとしている。つまり匂いは曖昧なわけです。文化の違いと同時性の両方を西欧の人にもわかるように提示しようと挑戦したのが、1997年に発表した「レモンプロジェクト03」という床をレモンで埋め尽くしたインスタレーションです。

以降も、食への関心が自分のひとつのスタイルになっていて、豆など食材を使った作品もつくっています。

—日本的なものに対する意識が芽ばえたのでしょうか。

はい。でも日本的なものだけをプレゼンしてもだめなんです。日本人が日本らしさを謳うのはステレオタイプ。海外にいつても着物を着ても、「それはあなたたちの文化です」で終わってしまいます。世界の最前線で戦うには、やはり彼らの文脈の中で戦わなくてははいけません。実は現代アートにもルールがあります。日本では一切教えてくれませんでした。僕はそれをイタリアで学びました。

—廣瀬さんの作品は素材や表現もさまざまです。作品はどのように発想するのでしょうか。

僕は旅が好きで、異なる文化から刺激をもらったりし

ています。それからよくやるのは、合いそうにないものを組み合わせてみるんです。オリジナリティーはまったく無のところからは生まれないと思っています。

本当はひと目見て誰の作品かわかる方が有名になりやすく売れるのですが、僕の作品はひとつひとつ異なり、あえてアイコンをつくっていません。ものごとはすごく複雑だという思いが強くて、感じたままをリアルに表現したいので、いろいろなタイプの作品になっています。

— アーツ前橋での個展では、赤い絨毯を敷き並べた作品も印象的でした。

あれは1998年に制作した「マーレ・ロッソ」という作品で、イランの遊牧民の手織りの巨大な絨毯です。展示会場にただ絨毯が敷いてあるだけなので、みんな最初は「これが作品なの？ただの絨毯じゃん」と思うのですが、そこに寝転がって会話したり、そういうチャンスが生まれる空間をつくりました。今はバーチャルに慣れすぎてしまって、リアルな感覚的なことが圧倒的に失われているので、絨毯を通して触覚に訴えかける作品をつくりました。

アーツ前橋のオープニングの時には、僕がバーテンダーになって皆さんにレモンジュースを飲んでいただきました。アーティストが偉ぶっていて話しかけにくい感じも嫌だったので、25年ほど前から他者とコミュニケーションを取ることも、アートの一部として積極的に取り入れています。それが批評空間にもつながっていくのです。

— 現代アートの楽しみ方を教えていただけますか。

見るだけで満足してしまって、言葉で説明することを嫌う人もいますが、アートと言えどもロジックの世界なんです。ロジックを読み解くことも現代アートの楽しみ方です。例えば、僕の「官能の庭」という作品は、大理石があり、そこに水が張ってあって花が浮いているだけなんです。そこにはロジックがあります。イタリア人に聞かれると「これは関係性を示しています」とまず伝えて、「花は水がないと生きていけない。水は器になっている大理石がないと溜まらない。何かひとつの要素が欠けると成立しない世界」と話すと、「すごい！ポエティック」と喜んでくれたりします。僕たちはこの作品を通して同じ時間を共有しているから、話をして空気が動くと花も動く、さらに花はその日の気分で変えることも自由なんです。そこに僕だけの意思ではなくて、作品が所有者や鑑賞者と共有されるのです。

— 何も感じ取ろうとしないと素通りしてしまうものも、いろいろな解釈によってどんどん引き込まれますね。

いい作品はいろいろな人が見て楽しめるようになって



マーレ・ロッソ、1998 ベルジャンギャベ 1944×604cm
(佐賀町エキジビット・スペース、東京 写真：Tartaruga © 2021, Satoshi Hirose All Rights Reserved.)

います。アートは解答を出すことではなくて、問いかけ続けることなんです。それがアートの役割のひとつだと思います。日常の中に潜む何でもないものを金に変える錬金術というか、それがコンセプトやアイデアで、作品には必ずストーリーがある。ピカソの作品は1点だけ見たのではだめで、彼がどう変化していったのか、どういう人生を歩んだのかということを含めて見ると楽しいと思いますし、そこに価値があるのです。ピカソをそういうふうに見始めると、また違って見えてきて面白いですよ。それから現代アートは現在のものなので、作品や考え方に共感したり、アーティストと直接話をして盛り上がることもできるのも魅力ではないでしょうか。

— コロナ禍の今、美術家として何か変化はありましたか。

以前はアーティストの自我が強くて出ている作品も楽しめたのですが、今は見るのが辛くなってしまいました。時代精神が作品にすごく反映されていることを再認識しました。

情報が氾濫している今、より良く生きていく方法を自ら決断できる能力がより求められています。そして、共有することの大切さを強く感じています。これからは自分さえよければいいという考えではなく、他者に対して心が開ける人が生き残っていきけるのではないのでしょうか。これからつくる作品も常に変化していくのではないかなと思っています。

— 貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2021年4月22日 小山登美夫ギャラリー
聞き手：関本竜太・中澤克秀・青木律典(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

廣瀬 智央 (ひろせ さとし)

1963年東京生まれ。1989年多摩美術大学を卒業後、91-92年イタリア政府給費奨学生として渡伊。96-97年ポーラ美術振興財団在外研修員としてイタリアにて研修。97年ミラノ・ブレラ美術アカデミーを修了。2008-09年には文化庁芸術家在外研修員としてニューヨークに滞在。現在もミラノを拠点に活動し、世界各地の展覧会に多数参加している。

第17回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際建築展レポート



宮内智久

仮面舞踏会

ビエンナーレ設営のための現場調査にヴェネチアに降り立った昨春、偶然にもマスクカーニバルの最終日だった。滞在先のリド島に向かう船の対岸に仮面ではしゃぐ人波が、時差ボケの眠気眼に印象的だった。民泊に着きおもむろにテレビをつけると、カーニバルが正午突然中止になったニュースが流れていた。ふと緊迫感がよぎった。それは、筆者が911にボストンにいた時、311の地震直後に経験したものを彷彿とさせた。急いでスーパーに向かうと街はすでに閑散としていた。

ところで、「検疫」を意味する英語「quarantine」は、イタリア語の「40日」が語源で、ペストが流行した時の船の中での隔離期間に由来する。中世ヴェネチア発祥の言葉であり、また仮面をつけるのもそもそもは感染を防ぐためだったらしい。ヴェネツィアの大運河に面して建つサンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂の中央には、ペストを老婆に模した疫病退散を願う像がある。今またその歴史が繰り返されているのかもしれない。

それから1年弱、2回の延期を経て、今年5月に第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展がいよいよ開幕した。この間に世界は様変わりしてしまったが、当初は芸術展が主体だったビエンナーレは世界大戦中も延期なく開催された歴史があり、中止にするつもりは毛頭ないようだった。ヴェネチアの歴史故かもしれないが、文化活動は軒並みキャンセルという風潮も再考の余地があると思う。



サンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂にある疫病退散を願う像

設営現場のアクセスは厳しく制限され、作業に入る全ての人が4日に1度、入口でPCR検査を受ける必要があった。このために何回検査を受けたかはもう忘れることにしよう。筆者はスペインのマドリード在住のためヴェネチアに渡航することができたが、シンガポール代表で設営に来られ

たのは私一人だった。しかしながら現地の強力なサポートのもと、無事開催を迎えることができた。準備期間中は、いくつか印象的な出来事を経験することができた。イタリアの現場職人さんの陽気な笑顔や、普段は観光客でごった返す街がヴェネチアFCのファンで埋め尽くされた光景、入江で船から2頭のイルカを間近で目撃することができたことなどが心に残った。地元の人は知っているのかどうか、イカ墨パスタと地ダコは疫病予防になるらしい。

人新世の建築展示

全体のキュレーションを務めるハシム・サルキスが提唱する地球規模のマクロな視点で建築を考えると、建築は宇宙の塵ほどにしか見えないかもしれない。それくらい引いた視点で俯瞰すると「我々はいかに共存していくのか」という今回の展示キュレーションのテーマにも納得できる。コロナも然り、我々はそれくらい引いた視点で人類の営みを再考しなくては、おおよそ解けない緊急な問題に直面しているのだ。地球をそのスケールで断面図に描くと、生命圏は一本の線ぐらいにしか見えない⁽¹⁾。環境破壊や搾取の諸問題は、そもそも薄い地球の表層を傷つけ、地中からさまざまな有害物を表出させ、大気と水源、生態圏を破壊してしまったことによる⁽²⁾。

印象的だったのは、サルキスが手掛けた「As One Planet」会場のいたるところで、さまざまな見せ方で鉱石が陳列されていたことだ。数億年前の絶滅した不思議な模様の花が化石化し、今なおなんとも神々しい香りを発する化石や（これを嗅ぐだけでも行った甲斐がある⁽³⁾）、地球に降り注いだ不思議な模様の隕石⁽⁴⁾、会場内で溶ける様子をモニタリングするために新潟から運んだ雪など⁽⁵⁾。鉄板を湾曲させ、時折ボコンと音をさせて南極の氷河が溶け落ちる音を表した展示もある⁽⁶⁾。

危機的状況にある人類の営みを俯瞰する視点で、行き詰まった文明のあり方を建築家の批評的思考力で再考した時、建築家に何ができるのであろうか。搾取をベースとした物質文明の政治化された環境問題をもまずは俯瞰し、より根本的な森羅万象、八百万なものとの関わり



「As One Planet」展示会場入口にある Cave_Bureauによる
「The Anthropocene Museum: Exhibit 3.0 Obsidian Rain」



シンガポール館「to gather: The Architecture of Relationships」

合いから「共存」の糸口を模索し、人と環境、生命圏のための建築を再構築することは可能なのだろうか。特に印象的だったのは主会場の入口で、問題のあるケニアの採掘現場から持ってきた大きな黒曜石をたくさん吊り宙に浮かせた演出だった⁽⁷⁾。これは問題提起であるとともに、この展示会のハイライトでもあり、希望をもった未来への展望ある素晴らしいメッセージでもあるように感じた。それは黒曜石が人々の悲しみを癒し、未来に向けて創造力を発揮することを促すパワーストーンであるからだ。入口に入った途端、筆者の縄文の血が騒いだ(気がした)。展示会が、ある意味祭典であるとしたら、このようなエネルギーを増幅させて未来につなぐことが本来必要とされているのであろう。展示会の開催意義を問われる時代において、今までのやり方では建築家は地球環境の破壊の大罪に加担した罪を問われることになりかねないのだ。

建築キュレーション再考

今回の建築展が2度の延期を経る間、各国のキュレーターが集い情報交換を行うキュレーター・コレクティブ(CC)という同志のグループが発足したことは不幸中の幸いであった⁽⁸⁾。コロナで開催が危ぶまれる中、各国が展示に向け「さてどうしよう」というところからスタートし、その後、各国の展示内容をもとにさまざまな協同事業を行うまでに発展した。今までキュレーター同士の横の連携があまり活発に行われていなかったのも不思議なくらいである。これまではそれぞれ自国の対応で精一杯であったが、オンラインでの情報共有が当たり前になり、時差はあるにせよオンライン上で各国のキュレーターが一堂に会し、意見交換ができるようになったのは面白い展開である。コロナという共通課題、そして延期を経て、このビエンナーレが一部のエリートのためのものでなく、さらに多様性と公益性の増す場になったことも時代の流れともいえる⁽⁹⁾。国も言葉も違えども、おカネ度外視で、建築家はその強い意志で世界を良くしようと一致団結できることは本当に素晴らしいことだと思う。

建築の分野において、展示キュレーションの考え方やその手法、各ビエンナーレの潮流やその意義について議

論される機会は、現代美術の分野に比べると、とても少ないように思う。建築家にとっては、図面や模型を人に見せて考えや意図を伝えることは、息を吸うがごとく自然にできるので、あえてキュレーションについて言及する必要性を感じないからかもしれない。建築においては建物を設計し建設し社会に還元する主たる行為があり、そのプロセスや副産物として出版や展示を行うこともある。しかし現代美術においては、ビエンナーレのようなキュレーションされた場が、その社会活動の表舞台になる。よって、建築の分野におけるキュレーションは、ある意味付け焼刃になってしまう傾向があるのではないだろうか。だが建築におけるキュレーションにおいて、日本の建築界は非常に層が厚いといえる。今回、日本人として3人がナショナルパビリオンのキュレーターを務めた。日本館の門脇耕三氏⁽¹⁰⁾、ドバイ館の寺本健一氏⁽¹¹⁾、シンガポール館は筆者である⁽¹²⁾。それぞれの立場からキュレーションやその意義について、3者による活発な意見交換も行い座談会として発信することができ⁽¹³⁾、今なおその活動は継続中である。建築は文化でもあるのだから。

〈注〉

- 1: <https://spbr.arq.br/pt/wp-content/uploads/2020/09/2017-Satellite-Project-EN.pdf>
- 2: McDonough, W. and Braungart, M. (2002). *Cradle to Cradle: Remaking the Way we Make Things*. North Point Press.
- 3: <https://www.agapakis.com/work/sublime>
- 4: <https://www.bethanyrigby.com/>
- 5: <https://www.designboom.com/art/melting-landscape-installation-kei-kaihoh-venice-biennale-05-23-2021/>
- 6: <https://www.lars-mueller-publishers.com/antarctic-resolution>
- 7: <https://www.ergodomus.it/portfolio-item/obsidian-rain-pavilion/>
- 8: <https://curatorscollective.org/>
- 9: <https://www.dezeen.com/2021/05/19/pandemic-venice-architecture-biennale-curator-hashim-sarkis/>
- 10: <https://www.vba2020.jp/>
- 11: <https://nationalpavilionuae.org/>
- 12: <https://to-gather.sg/>
- 13: ヴェネチア・ビエンナーレ 建築展 日本館・シンガポール館・UAE館 日本人キュレーター公開会議: <https://youtu.be/58LHy98eJbY>

宮内智久 (みやうちともひさ)

2000年南カリフォルニア建築大学卒業。2004年ハーバード大学GSD大学院修了。2007～2017年『a+u 建築と都市』副編集長。2012～2020年シンガポール国立大学環境デザイン学部建築学科上級講師。2012年～現在、宮内智久建築都市研究所主宰。第15・16・17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展シンガポール館のキュレーターを務める。

近畿支部

大学院生を中心とした学生委員会 通称「HAZAMA LAB.」を設立



近畿支部
学生委員会
岡本典子

■学生委員会設立の経緯

皆様も承知の通り、JIA近畿支部には、他支部同様に以前より学生会員は在籍していましたが(例年近畿支部学生卒業設計コンクール入賞者の方々にはJIA学生会員になってもらっていましたが)、JIA側で上手くフォローができておらず、彼らの「活躍する場」が実質的になかったのが実情でした。このことは、本部でもたびたび議論された課題であり、彼らが活躍できる場をつくることは急務でした。そこで、私が支部長に就任した昨年6月より、学生会員の活躍の場として学生委員会を設立することにし、この1年間、どのような活動が可能かを話し合ってきました。(JIA近畿支部支部長 津田茂)

■近畿支部学生委員会について

HAZAMA LAB.という名前の意味

卒業設計を頑張って乗り切り、無事に卒業したかと思えば、気の休まる間もなく就職活動が始まる。そんな経験をする大学院生は多いのではないのでしょうか。不安や戸惑いでいっぱい就職活動は、進学してすぐにその存在感を思い知らされると同時に、自分たちが社会への入り口にいるという事実を認識させられます。

私たちは今、「そんなこと思ってもみなかった！」と言いたくなるようなくらい一瞬で終わってしまう大学院の2年間で、一体大学院生とは何なのか、ということを探ろうとしています。卒業設計を乗り越えて、ただ「学生」と表現するには物足りず、かといって「社会人」でもないまだまだ未熟な存在の大学院生。この状況を学生と社会人の狭間にいると捉え、大学院生が集まったこの

学生委員会を、私たちは「HAZAMA LAB.」と名付けました。

さて、それでは大学院生の存在意義ってどこにあるのでしょうか。それはきっと、卒業設計で養った社会を見る目と、新鮮に映る社会に対する学生的な視点・視野を使えること

なのではないかと私たちは感じています。それらを大事にしながらかつ活動していきたいと思っています。



図2 近畿支部広報誌「table」でも紹介

建築と社会の関係性を、 大学院生の視点から見つめるレビュー執筆

JIA近畿支部に所属されていた建築家の方々が現役を引退されることで、行き場を失った価値のある大切な書籍が数多くあります。JIAメンバーからのアドバイスもあり、その書籍を集め、学生が気に入ったら自分のものとしてよい「JIAライブラリー」とすることを想定しています。そしてそれらの書籍が、なかなか気軽には書籍を購入できない学生の手に渡ると、世代を超えた知識の継承につながります。それはまた私たちの次の世代へと受け継がれる可能性を秘めた循環へとつながります。

こうした書籍を活用し、HAZAMA LAB.ではメンバーそれぞれが気になった書籍のレビューを執筆する活動を始めています。レビューにまとめた書籍の内容から、「建築」と「社会」の関係性をダイアグラムに表現することで見出していくという試みです。

しおり 葉をキーツールに

書籍のレビューは、いずれはHAZAMA LAB.メンバー以外の学生や社会人の方々にも書いていただけるような仕組みにしていきたいと考えています。そこで、HAZAMA LAB.ではJIAライブラリーの書籍に“葉”を挟み、それを循環のキーツールとすることにしました。メンバー以外の皆様には葉を見て活動を知っていただき、



図1
Zoom会議の様子



図3 レビューからダイアグラムを制作している様子

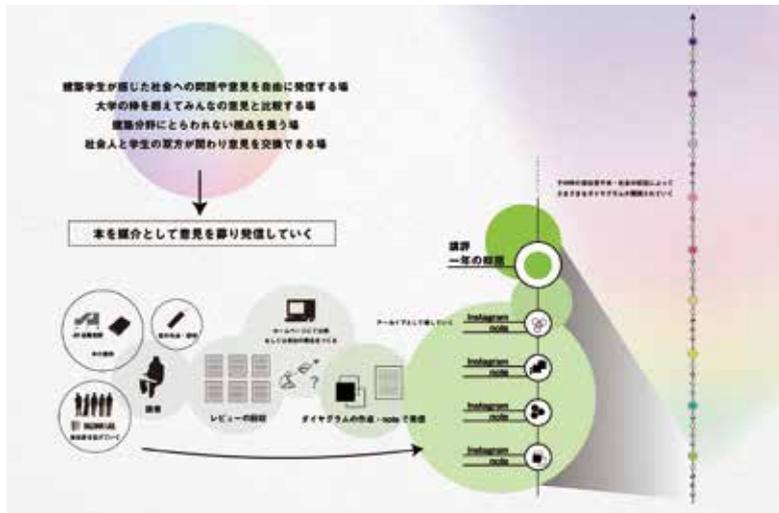


図4 HAZAMA LAB. 活動の流れ

レビューを投稿することでこの活動に参加する、そんな役割を葉が担ってくれることを期待しています。図4の右側で円形が連なってつながっていくように表現している通り、書籍のレビューから生まれたダイアグラムを蓄積してアーカイブしていくことで、この活動の真の価値が生まれ、後から振り返った時に時代の流れを目で見て実感できるものになりたいと考えています。

コロナ禍を超えてHAZAMA LAB.の活動に掛ける想い

コロナ禍により、以前のように活動できない事実は、世界中多くの人が共通していることです。例えば大学院生の私たちは、学生生活最後のわずか2年間というとても貴重な時間の中で、このような状況下となり、どうすれば社会に有効なものをつくり出せるだろうかと、暗中模索で過ごしてきました。しかし、不安な日々ではありませんが、人とは不思議なもので、環境が変われども成長はいつでもできるということを実感したのも事実です。コロナ禍の状況が私たちに危機感を抱かせ、HAZAMA LAB.の活動を後押ししています。

危機感というネガティブな意味が強い言葉ですが、人間にしか持つことができないとても大事な能力です。建築のけの字もわかっていなかった学部1年生の時に、奈良女子大学で現在もお世話になっている長田直之先生が、「技術が進歩し続ける世界の中で人間にしかできないことは、意思と欲望を持つことだ」とおっしゃいました。意思と欲望という前向きな言葉ですが、危機感というのも人間にしか抱けない感情・感覚のうちの、ものを創造する上で重要な感覚だと考えています。その言葉が私の中にずっと残っており、人間にしかつくりだせないものとは何かと考えながら卒業設計に取り組んでいました。「自分」にとことんこだわって、「自分」を詰め込んだ、つまり意思と欲望の詰まった卒業設計には、おそらく自分でも気付いていない自分が作品の中に込められていて、時間をかけてその創造の種に気づいていくのではと思う

のです。そんな大事な作品を卒業時につくるのは、世の中にモノをつくり出す類の専門を学ぶことでしかできないのではないのでしょうか。その中でも建築は人間が過ごす空間をデザインする分野ですから、よりいっそう、建築学生の卒業設計は、学生自身にとっても社会に対しても、深掘りしていく価値のあるものだと考えています。

では、自身の卒業設計を乗り越えて、想像の種を持ち、深みが増した周囲の大学院生の皆さんは、どんな意思と欲望を持っているのでしょうか。さまざまな状況に挟まれたセンシティブな大学院生が中心となり、考えていることをレビューとして執筆し、ダイアグラムに表現することは、とても刺激的なことではないのでしょうか。これからどのように活動が形になっていくのか、HAZAMA LAB.の活動をどのように伝えることができるのか、私自身も楽しみです。皆さんにもHAZAMA LAB.の活動を見守っていただけましたら幸いです。

思いがけない幸運

これまでに参加、運営してきた建築学生によるさまざまな活動においては、建築家の方々に講評者としてお迎えしたいと考えても、緊張や戸惑いでご連絡を差し上げるのに恐縮してしまうことが多く、なかなか近寄りがたいような存在でした。今回は想像もしていなかったJIAの建築家の皆様からのお声かけで始まった学生委員会ということで、大変嬉しく貴重な機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。

●近畿支部学生委員会メンバー

尾石光(千葉大学大学院)、岡本典子(奈良女子大学大学院)、鹿山勇太(大阪工業大学大学院)、中上和哉(神戸大学大学院)、名富心(大阪市立大学大学院)、伊賀正集(大阪市立大学大学院)、上田雄貴(大阪工業大学大学院)、篠山航大(神戸大学大学院)、周戸南々香(京都大学大学院)

残したい地域の歴史・風景

—城東地域エリアの景観・歴史・環境遺産—



城東地域会代表
小川成洋

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

城東地域は、足立・荒川・江戸川・葛飾・江東・墨田・台東の7区で形成されるエリアです。東京都の東に位置するこの地域は、震災や水害など、さまざまな災害と戦い、開発されてきたエリアです。今回は保存問題東京大会の資料をベースに、城東地域の災害との戦いの記憶と備えをテーマにまとめてみました。

永代橋・清洲橋 震災復興の力強い意思

重要文化財

設計 太田圓三・田中豊・竹中喜忠・鈴木精一／1926年

震災復興で建設された隅田川に架かる橋。さまざまな意匠の橋が架橋されたが、永代橋は都のゲートと位置づけられ「帝都東京の門」と呼ばれ、力強いデザインなのに対し、清洲橋は「震災復興の華」と呼ばれ、優しさの感じられるデザインとなっている。関東大震災の復興事業では、橋梁をはじめ復興小学校や集合住宅等、その後の指針となる意匠的にもレベルの高い都市デザインや建築がつくられた。当時の技術者・建築家の高い技量が感じられる。



永代橋



清洲橋

東京都慰霊堂 関東大震災の慰霊

都選定歴史的建造物

設計：伊東忠太／1930年

関東大震災で亡くなった数万の人々のご遺骨を納めるため、被害の大きかった被服廠跡地に震災復興事業として建設された慰霊堂。塔の基壇の部分が納骨堂になっている。寺院のような外観だが、密かに配された妖怪たちなど、細部には伊東忠太らしいデザインが見られる。三重塔と講堂を一体化し、平面的にはバシリカ形式とするなど、伊東らしい折衷様式だが、重厚で重々しい建築である。近接する安田庭園からつながる緑は貴重な景観を形成する。



東京都慰霊堂

東京都復興記念館 関東大震災の記憶の継承

都選定歴史的建造物

設計：伊東忠太(意匠)・佐野利器(構造)／1931年

東京都慰霊堂とともに横綱町公園に建つ。さまざまな様式を集めたデザインだが、プランは明解であり、上階のトップライトの空間は美しい。東京都慰霊堂とはまったく違うデザインなのは建物の用途を考えた上でであろうか。館内には関東大震災の被害と復興の資料を展示している。資料保管の整備が不十分なのが残念だが、将来に向けて大切に残してほしい建物である。



東京都復興記念館

水元公園 閘門橋 明治時代の水害との戦いの記憶を留めるレンガ橋

1909年

古利根川(旧中川)と小合川(旧大場川)の流れを調整するために、1909(明治42)年に造られた閘門橋。煉瓦造のアーチ形式で、アーチの両脇にある柱の溝に木製の堰板を差し込んで水門を閉鎖したと思われる。機能的ながら、手すりやバルコニーに景観への配慮が感じられる。ブロンズ像は後で設置。都内唯一の煉瓦アーチ橋で、経済産業省が近代化産業遺産に認定。また、土木学会の選奨土木遺産・近代土木遺産2800選に選出されている。



水元公園 閘門橋

木造住宅密集地の景観 危険だが魅力的な風景

1930年代から1950年代にかけて

災害時の安全性が問われる木造住宅密集地。道路の整備が遅れ、木造住宅が密集し、火災の延焼、木造家屋の倒壊の危険性が指摘される。一方では下町らしいコミュニティが形成され、曲がりくねった路地空間が迷路をつくり、魅力的な景観を形成している。道路の拡幅、建物の不燃化だけが木造住宅密集地の安全性を高める方策だろうか。身体的なスケール感、路地がつくる迷路空間、路地園芸の醸し出すしっとりとした空気、そんな景観を残したい。



木造住宅密集地

東京都白髭防災団地 火災から都民を守る巨大な壁

設計：東京都／1986年

隅田川に沿って十数棟もの高層の建物が板状に並び、異様な景観が周囲の木造密集地とのコントラストを描く。昭和40年代の防災拠点構想により建設され、巨大なゲートをくぐると建物に囲まれるように避難広場がつくられている。バルコニーにはシャッターがめぐり、放水銃が取り付けられる。その安全性を確かめるすべはないが、無用の長物であることを願う。



東京都白髭防災団地

荒川放水路(現：荒川) 明治・大正・昭和と続いた水害との戦い

設計：内務省／1911年～1930年

1910(明治43)年に発生した関東大水害を契機に、根本的な首都の水害対策の必要性から、全長22km・幅約500mに及ぶ荒川放水路の建設が決定。工事は、重機のない時代で大半が手作業であり、工事動員数300万人以上、完全に完了するまで17年という歳月を要し、30名近くの犠牲者も出す難工事となった。今では悠久の流れを感じさせる大河だが、これを人の手で作り出したと考えると、当時の人々の業績に畏敬の念を禁じ得ない。



荒川放水路(現：荒川)

葛西臨海公園・葛西水族園 秘められた防災の精神

設計：東京都・谷口吉生(水族園・展望施設等)／1989年

広大な緑に浮かぶガラスドームの水族園や、透明感のあるクリスタルビュー、ビオトープの先駆けともいえる鳥類園など、今では自然を楽しむ市民の憩いの場となっている葛西臨海公園だが、これも災害とは無縁ではない。臨海公園を含む葛西沖開発事業は、環境悪化、特に地盤沈下による民有地の水没等を契機とする開発事業だった。埋め立て地の地盤は、海拔5m以上に設定され、広域の避難エリアとなり、クリスタルビューのある丘は、海拔ゼロメートル地帯の江戸川区を高波から守る防波堤の役割を担っている。



葛西臨海公園・葛西水族園

東京スカイツリー 東日本大震災復興のシンボル

設計：日建設計／2012年

東京スカイツリーは災害とは直接関係しない。しかし、竣工前年の2011年に東日本大震災に襲われ、構造的にメインシステムだった心柱が固定される前だったため、大いに心配された。しかし大きな損害を受けることなく、翌年には無事竣工。東日本大震災で大きなダメージを受けた日本にとっては、久々の明るい話題で、夜空に輝くスカイツリーは、震災に疲れた人々にとって、復興のシンボルとなったのではないだろうか。



東京スカイツリー



東京文化会館

城東地域には谷中や深川のような下町風情の残る魅力的な風景や、国立西洋美術館・東京文化会館などの近代建築も多くあります。オリンピックレガシーとなる、オリンピック施設も多くが城東地域に建設されています。城東地域会では、東京水景デザインサーベイや、まち歩きなどのイベントを通して、今後も地域の魅力を紹介していきたいと思えます。

専門性と総合性の コミュニケーションが生む 「いい建築」



デザイン部会長
山本想太郎

2021年6月、建築まちづくり委員会にて標記のタイトルでプレゼンテーションの機会をいただいた。その論旨概要をここに記録したい。

新国立競技場の国際コンペは2012年、計画が社会問題となったのは2013～15年のことであった。私が倉方俊輔氏と『みんなの建築コンペ論』を著したきっかけもこの騒動ではあったが、実は関心の中心は新国立競技場という建築自体ではなく、この問題が照らし出した、建築界と社会との関係性の歪みであった。たとえば建設費が高すぎるという話題において、はたして私たちは、ザハ・ハイド氏の設計案がどのくらい「いい建築」であり、その対価としてこの工事費が高いのか安いのか、という議論をすることができていただろうか。それどころか、その議論のための共通の言葉すら持っていなかったのではないのか。この根本的な問題が検証、解決されないまま、「白紙撤回」、全く異なるプロセスでの建設、オリンピック開催、閉幕。それでこの騒動記を終了してしまったなら、旧国立競技場の消失と、巨大な新国立競技場の出現という結果以外に、社会には何も残らない。

建築コンペとは何か。多くの建築提案を競わせ、それらの中から1つを選択するというようなイベントが、なぜ必要なのか。その背景にある社会のさまざまな欲望の分析は拙著をお読みいただくとして、大概にまとめるなら、社会が「いい建築」を得る、得続けるためというあたり前の理由となろう。では「いい建築」とは何か。たとえば1950年代の日本のように、住む家や、社会基盤となる施設が圧倒的に不足している社会状況であるならば、その必要性を満たしているかどうかという観点でも一定の社会的評価はできただろう。しかし困窮解消後の、2周目の都市建築の計画においては、本来はまず「なぜそれを建てるのか」が議論され、合意されなければならない。そしてそれが「いい建築」の評価軸となる。

しかしその議論をみんなですることは容易^{たやす}くない。これまで建築家、建築関係者といった専門家たちは、熱心に建築の「質」を高める努力を重ねてきた。一方でそれが社会と対峙するとき、最終的に求められるのは「質」ではなく「価値」、すなわち売り手と買い手の合意であ

るということには、しっかりと目を向けてこなかったのではないか。その結果「専門性」の言葉は、錯綜する文脈をやわらかに俯瞰するような一般社会の感覚である「総合性」とのコミュニケーション力を失ってしまった。

コンペはその原理として、「選ぶもの」と「選ばれるもの」という対立構造をもつ。選ばれるのはもちろん建築(家)であり、「選ぶもの」はその建築の使用者、あるいはその代表者であるべきである。すなわちコンペには建築計画を舞台とした「専門性」と「総合性」の真剣な対峙を生み出す潜在力があるのである。新国立競技場計画でもコンペから遅れたタイミングではあったが、社会問題化によってまさにこの状態が生まれつつあった。そしてその議論を「白紙撤回」で断ち切ったことは、一連の騒動のなかでの最大の過ちであったと考える。このような社会的な議論こそ、「専門性」のブラックボックスと化してしまっている社会文化を、いま一度「総合性」と協働して再構築していく可能性そのものなのだから。

「みんなの建築コンペ」は、専門性に閉じてしまっているコンペという形式を、「『いい建築』を合意するプロセス」という概念に変換する提案である。それは計画のスタートから設計を発注するまでの全プロセスを包含する。従来のコンペは「どの案を選ぶか」のプロセスだったが、その前段階の「どのような方法で選ぶか」の判断の方が結果に大きく影響するし、「専門性」と「総合性」の協議にも相応しい。建築のあらゆるプロセスを開く新しいコンペは、建築を本質的にみんなのものとするための、社会的コミュニケーションの基盤となるはずである。



『みんなの建築コンペ論
—新国立競技場問題をこえて』

山本想太郎+倉方俊輔 著
2020年、NTT出版

- 2021年10月21日(木)、デザイン部会による公開オンライン・イベント「建築コンペとは何か」を開催します。
<http://www.atyam.net/jia.html>

「小住宅こそオンライン見学会」part 1

—企画から事前収録と編集まで—



アーバントリップ
実行委員会
中村雅子
(本企画コーディネーター)

2020年度、アーバントリップ実行委員会では従来集ったバスツアーや徒歩見学会が実施できず、やきもきしてました。その中、今までご要望が多かった「小住宅の名作」「清家清 自邸=私の家」の見学会をオンラインで開催することができました。

コロナ禍の中、慣れない対策を取りながら実施した経緯を2回に分けてお話しします。

Phase 1: はじめ 八木幸二・ゆり(清家清氏ご長女) 夫妻から、リモート見学会にご協力いただける旨、承諾を得て動きだしました。

Phase 2: 企画 実施の約2カ月前に八木夫妻に実際の「私の家」をご案内していただき、資料の提供と質問やエピソードなどをうかがいました。事前に大まかな構成を考えておき、この下見でのヒアリングを加味して見学会のシナリオを作成することが、事前の撮影と実際の配信に向けて非常に大切なことでした。事前撮影ではこのシナリオに沿って撮影し、補足写真などの画像も入れた動画を元編集し、それを委員で進行に合わせながら再編集するという順序で進めました。(大川直治)

Phase 3: 事前収録 狭い路地のような小径を抜けると異空間「私の家」がありました。八木夫妻に案内してもらいながら自由に語っていただき、一気に撮ることにしました。違いのわかる女性、八木ゆりさんの勢いのあるトークと、控えめに、しかしさりげなくプロの目線で補うご主人の幸二さんの絶妙なコンビネーションのおかげで、2時間あまりの撮影はスムーズに終わりました。これを編集で1時間にまとめるわけですが、この長さは、私がNHK報道局時代に撮ったNHKスペシャル並みです。(浜谷修三)

Phase 4: 事前録画の編集 収録した2時間の動画を半分の1時間に短縮する編集作業は、アーバントリップ委員総出でhamaproに、無理をお願いしながら実現しました。



「私の家」
内部を見学



hamaproによる事前収録

Phase 5: 本番の構成を考える 配信の構成としては、当日の現地からのライブ映像と事前撮影動画を交互に配信することにより、八木ご夫妻との直接のやりとりを大切にしながら、「私の家」の臨場感を伝えることを意図しました。具体的には、事前撮影動画は20分程度の3部構成とし、合間合間に感想や質疑なども入れておく構成を取りました(NHKの「日曜美術館」のような構成)。事前編集では、元編集動画を1時間程度に短くするとともに、話の内容を補足する図面・写真・説明文を入れました。事前に資料をダウンロードしていただけるようにしましたが、動画を見ながら図面や写真を見られるようにしたことで、理解度が深まり、小規模な住宅で画角に納まり切らない範囲をカバーできたのではないかと思います。これは事前に撮影したからこそできることで、大変有効だと思います。(大川直治)

次号につづく▶

●執筆協力者



アーバントリップ委員
大川直治
(企画協力)



hamapro
浜谷修三
(映像撮影&編集)



新国際通信社
神村正晴
(協力)



アーバントリップ委員
南 知之
(ライブ配信: Zoom
画面管理)

オンラインセミナー開催概要

第92回 JIA アーバントリップ 「私の家」から清家清を探る
2020年10月22日(木) 17:00~19:00 CPD:2単位

主催: JIA 関東甲信越支部アーバントリップ実行委員会

協賛: 旭ビルウォール株式会社、株式会社イケガミ、三協立山株式会社、株式会社ユニオン、株式会社LIXIL

案内者: 八木ゆり(清家清氏 長女)、八木幸二(建築家・養蜂家・東京工業大学名誉教授・京都女子大学名誉教授)

オンライン: Zoom ミーティング(参加者 100名)

アンケート: Google フォーム

オンライン会場: 「清家清・私の家」無線インターネットサーバーレンタル配信

異文化を通して見えてきたこと



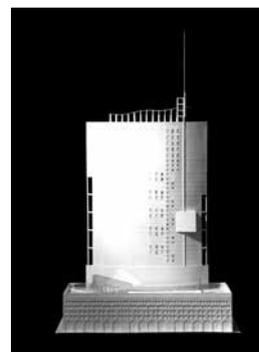
佐藤尚巳

大学卒業後菊竹清訓先生の事務所に入所を許された。先生が発する強烈な個性と指導力を間近で感じながら、建築に向かう姿勢を学ばせていただいた。30歳を前に独立を意識し始めたが、デザインの視野を広げたいと考え海外留学を決めた。

留学先はアメリカ東海岸を選んだ。諸先輩が数多く留学しており身近に感じられたことと、世界中の文化や情報、教授や学生が集まる環境にあったことも大きい。幸いハーバード大学のGraduate School of Design (GSD)に入学を許可された。入学に際して学生課の担当者から大変印象的なことをアドバイスされた。留学生はハネムーン期間が終わるとホームシックすなわちEthnocentrism(自民族中心主義)という自国の文化が最も優れている、と思いつくようになるという。対処法として誰もがそう思っていることを理解すれば、自国のことが客観的に見られ、気持ちが楽になるとのこと。日本人は日本食が世界一美味しいと思っている。しかし他国の人も同様に思っているのである。食べ慣れた食事が美味しいと感じるのは当たり前のことで、大切なのは誰もがそう思っていることを理解することなのである。他人の文化を認めることから相互理解は始まる。その後の自分の人生の基本スタンスとなった衝撃的な瞬間であった。人種のつばアメリカへの留学は大正解であったと思う。

GSDの建物には階段状の巨大なスタジオ空間があり、その中に各自2m四方くらいの設計製図コーナーを与えられる。セメスターごとに指導教官が入れ替わり、設計テーマが与えられてスタジオが進んでいく。400人くらいの学生が一堂に集まって設計製図を行うので、他人の計画が自由に見られ、意見交換もでき大変刺激的であった。1年半で3つのスタジオを選んだが、最初の指導教官はI.M.ペイ事務所シニアアーキテクトのハロルド・フレデンバーグ氏。ニューヨークの超高層ビルの計画であった。得意の模型技術を駆使して印象的なプレゼができたと思う。彼の伝手で卒業後にペイ事務所の入所が叶った。2つ目のスタジオの指導教官は、竹山実氏と谷口吉生氏。課題は東京国際フォーラムで基本計画段階のプログラムを使つての計画であった。アメリカまで来て

なぜ日本人教官なのかと落胆もしたが、結果としてはペイ事務所からラファエルヴィニオリ事務所へ転籍し、東京国際フォーラムの設計監理に関わるきっかけになった。人生の大きな節目の1つである。3つ目はラファエル・モネオ建築学科主任教授のスタジオで、ポスト



GSDでの作品

ン南駅の計画であった。欧州を代表する建築家の設計思想に触れることができ大変印象深いスタジオであった。

I.M.ペイの事務所でもいくつかの発見があった。彼らの設計の原点にあるのが組積造文化である。柱芯を基に構築する木造と異なり、組積造では壁面を基準に空間を構成するので、床壁天井の素材の割付に非常にこだわり、目地が作り出すジオメトリーの完璧さを追求していた。もう1つの特筆すべきことは、建築家の役割分担である。設計業務はSchematic Design (SD)、Design Development (DD)、Construction Document (CD)の3段階に分かれており、有名建築家はデザインアーキテクトとしてSDとDDを担当し、施工図に相当するCDは地元の設計事務所が担当することが多い。日本や欧州では1人の建築家が最初から最後まで責任を負うがアメリカでは分業なのである。クライアントが各方面の能力の長けた人や組織を集めてコラボレーションをさせる。専門業種に特化したコンサルも数多く関わってくるので、その調整業務が尋常ではない。独立後もデザインアーキテクトとしての仕事が多くなったのもこの時の経験が大きい。

4年半のアメリカ滞在で建築に関するさまざまな知識や経験を得ることができたが、同時に生活意識も大いに変わった。「自分の生命、家族、財産は自分で守る。自分の判断で行動し、自分で責任を取る」という自己責任の意識が高まった。世界的にはこれが常識であるのに対して、日本では残念ながらその意識は薄い。安全安心な社会は確かに望ましく思えるが、過保護な社会が日本人の自立を妨げ、危機意識の欠落を招いていることが危惧される。

住宅建築家への道

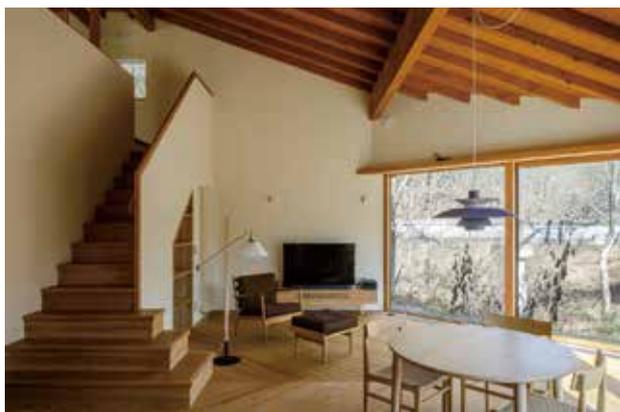


井野勇志

大工の棟梁だった祖父に憧れ建築の世界に興味をもち、40年ほど経過した。今までさまざまな経験をする機会を得た。少しでも早く建築を学びたく、建築学科のある高校一択で進路を決め、意匠に興味をもち本を読み漁った。その後、短大は構造研究室、大学と大学院は意匠研究室を経験。仕事は、行政、リゾートホテル、性能評価機関であったが、常に住宅への興味を貫き通していた。

設計事務所を開設して9年目。多くの住宅の設計に関わった。私は、職人との対話を楽しみ大事にして仕事をしている。独立して間もない頃、「お前、木造知らないだろ！」っと、棟梁に一喝された。怖かったことと悔しい気持ちを思い出す。それから、現場では見て覚え、詳細図は、職人に直接意見を聞いて精度を上げてきた。時には一緒に手を動かすこともある。上棟は“カケヤ”を持って1日現場を手伝い覚え、その日の夜は職人と一緒に宴をする。そんなことを繰り返してきて、今では、関わる全ての職人と腹を割って話すようになり、住宅をつくる大事なチームができた。また、私の拠点が寒冷地のため、高断熱高气密にも力を入れているが、意匠と性能だけでなく、職人が納得いくディテールを考え、築かれた信頼関係が私の期待以上の納まりを実現してきている。

自分が目指すべき住宅建築家像は、意匠と温熱、職人技、さらに構造、全てを大事にすること。当たり前のことではあるが、私自身はまだ未熟者。皆様から多くを学ばせていただき、建築家として恥じないような力をつけられるように精進していきたいと思います。



意匠、温熱、構造、施工性を活かした別荘の実例

多拠点で設計する

—都市の形を考える—



伊藤立平

(写真：生熊智 Techni Staff)

私は大学で建築を学び、組織事務所で実務を学んだ後、自分たちで考える建築を目指して独立し今日に至ります。鎌倉の新興住宅地で育ち、東京にある大学に通い、大阪で仕事をすることが今の私の仕事の土台になりました。

これからも都市は都市として、自然は自然として存在感を持ってあり続け、場所場所での人間の生活は魅力を高めつつあると感じます。それに気付かせてくれたのは、私の「移動」に伴う経験によるものです。「移動」に関わり続けたいという気持ちの整理がつかず、私自身が関東と関西の2拠点で設計することで折り合いをつけようと考えました。

私の尊敬する人生の先輩が、仕事をするたびに実家が1つずつ増えていくとおっしゃっていました。まさにその通りで、設計を続けるということは、さまざまな場所での人との付き合いを積み重ね、多拠点を繋いでいくことだと思います。

これからどのような生活になるのか楽しみではありますが、体力は衰える一方なので、整理の方法を同時に考える必要があります。

設計では、仕事ごとの個性が現れるようにしたいと思っています。クライアントは皆さん個性の塊であるはずなので、個性を失わないように状況を育てていくことを心がけています。現在は地域の農・林・漁業、再生エネルギーを、より魅力的にする設計に取り組んでいます。

このたびJIAに入会させていただきました。新たな1つの繋がりを大事にしたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



下北山村移住交流体験施設「むらんち」。公共事業ながら、村民と学生が参加可能なソフト事業とハード事業を組み合わせた先駆事例。地元材100%で地産地消を目指した。滞在しながら村人と交流し、時間を共有するための拠点。(写真：都甲ユウタ)

交流委員会

オンライン技術セミナー開催

—第4回から第7回の報告—



交流委員会委員長
相野谷誠志

交流委員会では、昨年度より設計者に向けたオンライン技術セミナーを開催しています。前号(『Bulletin』2021夏号)でご紹介したように、5、6月には4回実施し、各回とも有意義なセミナーを行うことができました。

今回は、5、6月に実施した第4回から第7回までのセミナーについてご報告します。

第4回オンライン技術セミナー 「建物緑化が建物にもたらす影響」

講演者：大日化成 東京支店
開催日：2021年5月21日(金)

地球温暖化や異常気象など、地球環境問題は深刻度を増し、都市部ではヒートアイランド現象が重要な問題となっています。それらを緩和するためのアプローチの1つとして、緑化、特に敷地面積に制限のある都市部では建物への緑化「屋上緑化」「壁面緑化」が考えられます。

今回は、大日化成の品川大介さんに屋上・壁面緑化の効果と計画段階でのチェックポイント、また、屋上・壁面緑化のタイプ別の特徴などを紹介いただきました。

緑化は、遮熱・断熱効果で空調効率を改善し、温室効果ガス(主にCO₂)の排出を減らすとともに、植物の光合成によるCO₂の吸収固定も期待できるそうです。また、屋上・壁面緑化は、都市景観の向上や生物多様性確保に加え、事業者の広告宣伝、建物利用者の環境改善(住環境、福利厚生)、建物の保護などさまざまな活用方法があります。その一方で、緑化の目的を明確にし、施工条件やメンテナンスとそのコストの把握など、計画段階における施主、利用者、設計者、施工者など各方面への合意形成が重要になってくるとのこと。建物緑化後に維持管理を行っている場合と行わない場合の違いも示していただき、フォローの大切さがわかりました。



壁面緑化事例：
千種文化小劇場(名古屋市)

第5回オンライン技術セミナー 「OAフロアの提案」

講演者：共同カイトック
開催日：2021年5月28日(金)

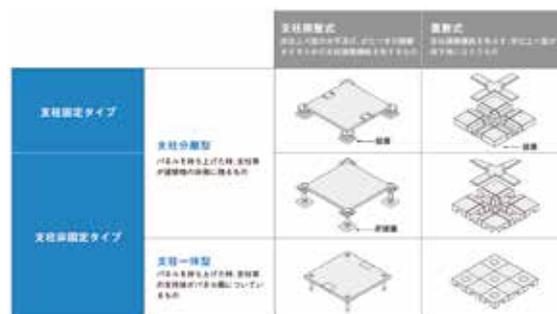
建築の情報システム化への対応として、OAフロアは不可欠ですが、細かく仕様を定めたことがなく、VE・CDで提案を受けることが多いのではないのでしょうか。

今回は、共同カイトックの贅田大河さんに、OAフロアの基礎知識から、設計、施工での留意点など、以下の内容をお話しいただきました。

- ①OAフロアの基礎知識
- ②性能規格・試験
 - 性能試験の重要性について説明
- ③選定のポイント
 - 規格や第三者認証の重要性や選定のポイントを案内
- ④試験だけでは見えないこと
 - グレーゾーンの実情について説明
- ⑤近年の動向
 - オフィス需要の変化や付加機能、耐震固定について
- ⑥電気設備の観点でみると
 - 選定には設備担当者の意見も必要。事例の紹介

〈講演者から、セミナー後の感想〉

講演後に、セミナー参加者からOAフロアのご相談がありました。設計にセミナー内容を考慮・反映いただけると大変嬉しいです。また機会があれば、当社の異なる事業領域である屋上・壁面緑化についてや、OAフロアについても内容をアレンジしてお届けします。



OAフロアの構造

第6回オンライン技術セミナー

「公共用蓄電システムの動向について」

講演者：GSユアサ
開催日：2021年6月3日(木)

脱炭素に対する環境貢献、スマートシティ、電気の需給調整市場、容量(将来供給取引)市場、系統の周波数調整、災害に対する事業継続対策など、社会や企業はその対応に向け動き出しています。

その対策の1つとして、公共施設等に導入されている、災害時の継続的建物機能維持(BCP)に不可欠な蓄電システムがあります。

今回は、GSユアサの森田祐介さんに、蓄電システムの市場用途、これからの動向や需要、主な環境省予算(補助金)、導入事例をご説明いただきました。GSユアサは自動車用や非常用だけの鉛蓄電池だけでなく、上述した用途に対するリチウムイオン蓄電システムもこれまでに多数導入しており、豊富な技術実績があります。

〈講演者から、セミナー後の感想〉

講演後に視聴御礼および当社PRのメールを発信させていただきました。早速、今後における有益な情報の提供依頼をいただきました。

今回のセミナー内容は市場全体的なものが主体でしたので、さらに掘り下げたもの、V2Xシステムをはじめとした当社製品のご紹介、導入システムの事例、補助金の計算等のご紹介ができればと思います。



導入事例：GSユアサ群馬事業所

第7回オンライン技術セミナー

「左官材・透水性舗装材について」

講演者：フッコー
開催日：2021年6月11日(金)

集中豪雨や大型台風による河川の氾濫や道路の冠水は、地球温暖化による異常気象が要因ですが、都市化にともなう地表面の遮水化も大きな問題となっています。

雨水の流出抑制対策が自治体や河川ごとに講じられ、都市開発や建物を建てる場合も、雨水排水計画について自治体との協議を義務化したり、公共施設では貯留・浸透施設の設置を推進する自治体が増えています。

浸透施設の活用の面で、透水性舗装材は今後ますます注目されるでしょう。それは自然災害の対策のほかにヒートアイランド現象の抑制など、快適な都市空間に寄与し、さらに水勾配計画や配筋工事が不要となるなど、実務面においてもメリットが多いからです。

今回は、フッコーの中込敦士さんに、透水性舗装仕上材「DRY TECH」(ドライテック)を主に、以下の内容でお話しいただきました。

- ・透水性舗装材とは
- ・透水性舗装材の機能性
- ・透水性舗装材の活用

〈講演者から、セミナー後の感想〉

講演内容について「非常にためになった」や「面白かった」といった感想をいただきました。今後、左官材・塗料についての講演も計画したいと考えています。



ドライテックの施工事例：東京国際クルーズターミナル

■今後の「オンライン技術セミナー」開催情報

8月、9月は以下のセミナーを実施しました(※発刊時には開催済み)。今後も継続していきますので、ぜひご参加ください。

- 第8回 「ライティング+αで変わる建築」/パナソニック(株)
- 第9回 「LED照明へのリニューアルについて」/パナソニック(株)
- 第10回 「実績から考えるーチタンはなぜ建築に使われるのかー」/日本製鉄(株)
- 第11回 「BCP(事業継続計画)からみた重要施設への安全対策」/能美防災(株)

長年培った施主との交流が財産



代田正司

私の事務所では、特に住宅の新規依頼は過去の施主あるいはその関係者からの紹介が主となっている。直近の仕事の例としては、高齢夫婦の終のすみかとなる住宅設計を依頼され完成した。12年前にこの夫婦の長男家族の住宅を設計しており、その時より両親から必ず家を建て直すから設計を頼みたいと予約されていた。長男宅設計の仕事は22年前に設計した他の住宅施主の紹介だった。ほぼ10年おきの仕事だが、長い年月施主との交流によってつながっていることに感謝している。

施主との建物引渡し後の頻繁な交流

私が独立し事務所を構えてからちょうど40年目に入った。40年前といえば今のようにインターネットやSNS等の情報発信ツールはほとんど無く、駆け出しの事務所が認知してもらうには苦勞する時代だった。試行錯誤の末考え出したのは、数少ない依頼主(施主)の元に建物引渡し後も建物チェック、近所を通りかかった等を口実に頻りに顔を出し、世間話をしながら施主の人脈もお借りして交流の輪を広げ、仕事のチャンスをうかがうことだった。この手法は徐々に実を結び、1人の施主から短期間に4件の仕事に広がったこともあった。施主との交流が増えていくに従い、この手法は成約率の高い強固な営業ツールとなって現在に続いている。施主の高齢化もあり依頼件数は減少傾向にあるが、今後もこの手法を1つの柱として大切にしていきたい。

同時にネット社会への対応も必須で、HPやFBなどSNSも運用し情報発信に励んでいるが、周知度が低いからか今一つ実を結んでいない。対応は今後の課題である。

苦勞するのは完成時期の調整

最初の面談は紹介者が同席することも多いが、まずはお互いの人柄、相性を見極め、これから長い時間を共にできるかを判断する場となる。具体的な話は次回以降とし、次回面談で基本的なヒアリングを行う。特に定型のフォーマットはなく、自由に話してもらい箇条書きにメモする。この時点で大まかな予算、希望する完成時期は必ず確認する。

苦勞するのは完成時期の調整だ。依頼者は1日でも早く新居での生活を希望して自分なりの工程を思い描いて

いることが多く、時間制約の無い仕事などまずない。じっくり時間をかけて設計を進めたい設計者との思惑は往々にしてぶつかる。あまりにも無茶な要求であれば、ここで辞退することを覚悟で説得に当たる。幸い住宅の設計で辞退するような例はなく、概ね一定水準の設計期間で合意している。この踏ん張りが建物の出来栄え・施主の満足につながると信じている。

このヒアリングで土地に関する資料を必ず準備いただく。この後現地で土地と周辺環境の調査を行い、1ヵ月の間に3回ほどのヒアリングを重ね、この住宅のテーマとなるものを決定していく。その後1ヵ月半程の期間をもらいプランを練り、プレゼンを仕上げる。プレゼン図面はCADで作成した配置を兼ねた平面図・立面図・断面図、特に断面図は空間説明のため何面かの断面を用意することもある。そして建物プロポーションを手にとって見られるよう、必ず模型を用意する。縮尺は1/100から1/60で適宜決定する。CGはほとんど使用しない。CGの効果は十分承知しているが、施主が綺麗さに目を奪われてしまいそれで満足してしまうことを恐れるからだ。この時点で大まかな工事費を提示するが、仕様・設備が決まっていないこともあり参考程度に留めてもらい、その後精度を高めていくこととしている。

プレゼン案には施主要望を多少裏切る箇所を潜ませておく。「え!」「何で」「なるほど」となればプレゼンに俄然力が入る。条件、希望を100%取り込み計画することは難しい。条件が欠けていてもそれを上回るアイデアを提案し、実現するのが腕の見せ所であり、次の仕事につながるものと思っている。



直近の仕事 高齢者夫婦の住まい

忘れていた原点



井上洋介

1991年京都大学卒業

昔の自分との対話

「卒業設計は部屋に貼っておけ！」と言っていたのは建築家の安藤忠雄だっただろうか。

僕の学生時代の課題は図面ケースに入れたまま玄関の脇においてある。仕事につまずいたり、やる気が出なかったり、そんな時ふと学生時代の作品を見返してみることがある。気恥ずかしさとともに、若い頃の純粋な気持ちを思い出す。今見ると表現は稚拙に見えるけれど、案外しっかり自分で考えていたんだとか、考えていることは当時とそんなに変わっていないんだとか、新たな気づきがある。当時の自分と対話しているようなそんな時間だ。こういう時間は、自分の原点を振り返るという意味で、決して無駄なことではないのかも知れない。自分は今いったいどこにいて、どこに向かっているんだろうかと、いやおうなく考えさせられるのだ。

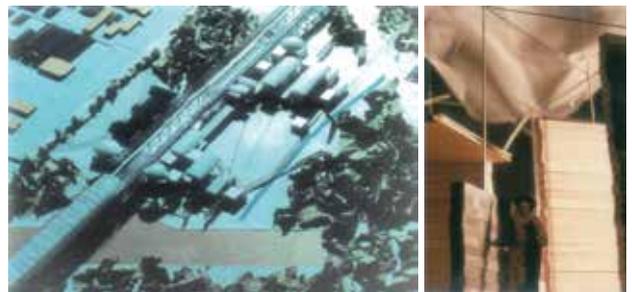
テーマを求めて

建築を学ぶ自分にとって卒業設計は学生時代の総決算、という気持ちもあったのだろう。テーマと敷地を探しに、カメラを携え京都の街を歩きまわった。何から手をつけていいんだかわからないまま、街を歩いては目にとまったものを、惹かれるままに写真に収めていた。日中はフィールドワーク、夜は机に向かいテーマを探す、そんな日々が続いた。

1989年、京都の街はいたるところで開発の話がもちあがっていた。そんな中自分がカメラに収めていたものは、地上げで歯抜けになった町家のトタン壁や瓦屋根、貨物ヤードの錆びた線路、枕木など、人々の生活を支えてきた時間の痕跡が感じられるものだった。時代から取り残されたようなそういうものをパッチワークのように縫い合わせて、修繕行為のような、そんな建築や都市の姿を夢想していた。心の底では、景気の波に乗って街を根こそぎ更地にして進められていく開発に対しての、モノの側からの異議申し立てのような気分があった。

廃材を使って

卒業設計の敷地で選んだのはJR二条駅の貨物ヤード



卒業設計の模型写真 二条駅および併設貨物ヤードの再開発

の跡地。明治末期に建てられた古い木造駅舎を残し、その周辺に操車場の廃材である枕木や線路のレールを使って、駅舎と広場、芝居小屋、店舗などをつくる計画だ。その頃僕は、自由に形をつくることよりむしろ、素材に着目し、そこから建築を考えることに興味をもち始めていた。錆びたレールを溶接してつくったH鋼で柱梁を構成し、その間に枕木を積んで壁にしたり、枕木にスチールのジョイントを組み合わせて螺旋階段をつくったり、そういうディテールを具体的に考えている時間が、いちばんリアリティがあって楽しかった。

卒業設計を終えて

卒業設計は京都で建築を学ぶ他大学の仲間と組織をつくり、京都市美術館で展覧会をやることができた。展覧会の後、作品は大学には提出せず、もう1年京都に残ることに決めた。卒業後の進路をじっくり考えたり、本を読んだり、旅行をしたり、在学中にやっておきたいと思うことがまだ残っていた。そして1年後、同じ敷地でテーマを変え、2度目の卒業設計をやって、5年間の大学生活を終えた。

大学を卒業してちょうど30年になる。当時考えていたことは、今も自分の中で生き続けている。



操車場の枕木とレール



コロナとデザイン 建築の本質を見つめなおす

JIA 学生会員 井筒悠斗
芝浦工業大学建築学部建築学科 3年

こんにちは、JIA学生会員の井筒悠斗です。

昨今の新型コロナウイルス感染拡大により、大学は大きな変容を余儀なくされました。私たち建築学部も例外ではなく、昨年まで当たり前だった先生方との交流も、いまや画面越しでの対話のみとなってしまいました。このような状況下での設計はやはり「これからの建築とは」というものを考えざるを得ません。

小学校の設計では、オンライン学習などで、場所にとらわれず学びを行えるようになった現代で、建築物としてそこに存在する小学校が与える「本当の学び」とは何かを長い時間考えました。コロナによる混乱は私たちに物事の本質を改めて見直す機会を与えてくれているのかもしれない。

技術の発展でより優れたハード面に目を奪われてしまいがちな昨今だからこそ、改めて建築とは、デザインとは、その



CGで作成した図書館の内観パース

本質に目を向けることで人々に長く愛される作品をつくることができると信じています。多くの人を感動させるデザインとは何かを研究し、すべての人に笑顔をもたらす「デザインの公式化」を行うことが私の目標です。

結びに、JIA学生部会に加入してくださった方々、会を援助してくださった支部の方々に深く感謝申し上げます。会の立ち上げからまだ日は浅いですが、深く交流も進み、学生同士の関係もできてきました。今後は具体的な活動に移り、それをこの場でまたご紹介できればと思います。



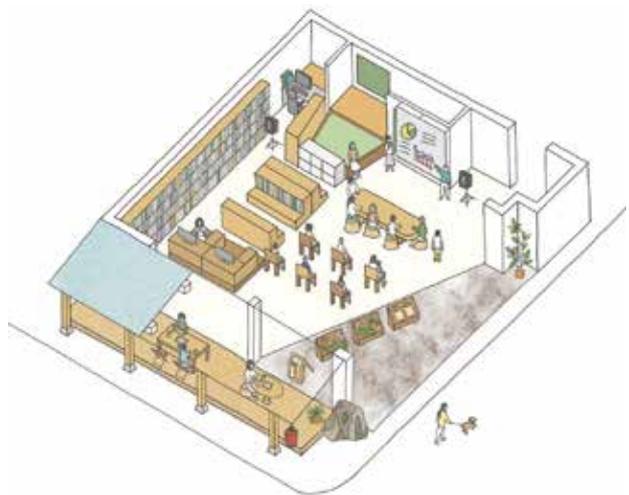
地域に学び 地域に返す

JIA 学生会員 寺澤基輝
宇都宮大学大学院博士前期課程 1年

宇都宮大学では「地域に学び、地域に返す、地域と大学の支え合い」をモットーに、県内各地で学ぶプログラムが用意されている。設計課題の敷地が県内であることはもちろん、「地域プロジェクト演習」という異分野共創型の講義も受講する。

この講義では、自治体・NPO等がパートナーとして地域の課題を提示し、コミュニティ・建築・土木の3分野混成チームで1年間かけて調査・企画・実践する。この講義は私たち学生に「地域で活動する楽しさ」を経験させ、「学生団体の創設」という大きなムーブメントも起こしている。

私も昨年UUAD(宇都宮大学建築デザイン学生ネットワーク)という学生団体を立ち上げた。栃木県内で空き家・空き店舗改修や、イベント企画、社会実験での屋外家具デザインなど学生による地域での実践を行い、メンバーは70人を超え、学内最大規模の団体に成長している。プロジェクトごとに少人数のチームを組み、1人ひとりの主体性を重んじるほか、「ネットワーク型団体」として緩やかなつながりをつくり、プロジェクト同士の連携や学年を超えた学びと経験の場を提



学部2年生岩田真菜さん作成の空き店舗改修イメージ

供している。現在は主に学部1～3年生が活動の中心であり、調査・企画・実践までをこなしている。

昨年度最大のプロジェクトが、佐野市での空き店舗改修「駄菓子・カフェ もりもり」である。学部2年生が里山再生企業の事務所兼地域交流拠点を地域の職人さんとともにデザインし、現在は多くの子どもたちや高齢者が集う場所となっている。また、新たに大学周辺のエリアリノベーションを仕掛け始めている。今後も栃木県が地域で建築を学ぶ充実した環境になることを目指し、活動していく。

蘇ったうさぎたち

高尚な趣味があるわけではないが、唯一40年ほど続いているものがある。そして、このコロナ自粛の中、関連してもう1つ楽しい趣味が増えた。

うさぎを集めている。生うさぎではない。“グッズ”。食器とかオーナメントとかアクセサリーとか。最初はキャラものも集めていた。今は、ミッフィーとピーターラビットだけは認めている。あとは伊万里とかヘレンドとか、バカラとかラリックとか、作家ものとか、骨董じゃないけど少し大人っぽいもの。

復活祭にはうさぎはつきものだから、海外に行くとも目移りするほど並んでいる。干支の中にもうさぎがいるので、卯年の前と十五夜の前には街に溢れる。なので収集家も多い。うさぎには愛嬌や表情があるなと思っている。特に日本の絵柄は野性味にあふれていたり可愛げがあったり楽しい。人間の生活の傍に共存していたことがわかる。

普段使いの食器もほとんどうさぎの絵柄。魚を食べても、肉を食べても、野菜を食べても、ケーキを食べても、終わるとうさぎが出てくる。楽しい。

そんな風に使っていると、安物もちょっと高価なものも、欠けたり割れたりする。当たり前だけど、真っ二つに割れたりする。かなりショック。捨てるに捨てられない。結果取っておくことになる。それが随分たまっていて、「これどうするつもり？」と相方に言われるが、ずっとたまる一方だった。



森多圭子さん作の茶碗

真っ二つに割れたお気に入りのうさぎ。金と銀で紐で結ぶようにしてみました。

しかし、このコロナ自粛生活で、そうだ、金継ぎをやってみようと思いつき、入門用のキットを買ってみた。本漆ではなく合成漆で扱いやすい。漆の管理はなかなか難しそうなので、初めて手をつけるにはハードルも高い。金も本物ではない。金継ぎと言えなくなってしまうが安価で気負わずにすむ。

付いてきたテキストとWebを頼りに小さなものから始めた。やってみると楽しい。ただつなぐだけでなく、その必要のないところにも塗ることで、違う世界が広がっていくことに気づき、どんどん手が進んだ。そしてまた使い始め、眠っていたものが蘇り、楽しい趣味ができたと同時に、壊れることも怖くなくなった。世間でも流行っているらしいが、いつかちゃんと習ってみたいと思いながらニマニマ使う毎日である。(倉島和弥)

感動したオリピック

編集後記

- オリピック、女子ゴルフの銀メダルすごかったなあ、銀メダルをかけたプレーオフでの集中力、仕事に集中できない夏だった。(望月)
- なんといっても、卓球混合ダブルス準々決勝(ドイツ戦)の最終ゲーム。生まれて初めて奇跡を目の前にした気分でした。(中澤)
- 連日のメダルの報に、夕方近くになるといつもソワソワ。ルールもわからない競技のにわかファンを続ける日々でした。疲れた！(関本)
- 開催反対、ボランティア辞退と荒れた中、期間中きっちりと会場ボランティアを務めた大学生の娘に、よく頑張りました！(市村)
- 馬場馬術の軽妙なステップに驚き。馬は祖国から空輸。近代五種の馬術は抽選で馬を決め20分の試乗ですぐ競技。馬術もいろいろ。(会田)

- 集団設計の課題における議論の合間にオリピックの雑談。開会式凄かった。何より元卓球部の私にはいろいろと熱すぎました！(長谷川)
- マラソン女子男子に釘付けでした。選手たちの駆け引きやコースの面白さに引き込まれ、気付くと選手と一緒に先走っていました。(青木)
- 私には2度目の東京オリピックでしたが、今回はコロナのお陰で堪能させていただきました。金メダルをはじめ数々の受賞おめでとうございます。(立石)
- コロナに翻弄され全てのことが初めてづくしのオリピック。アスリートや大会スタッフ、ボランティアとたくさんの感動をいただきました。(吉田)

『Bulletin』バックナンバー Web公開 JIAの公益社団法人改組に伴い、2013年より中止していた『Bulletin』のバックナンバー閲覧ですが、9月より支部Webサイトに2016年からの5年度分をPDFで掲載しています。今後は、『Bulletin』発刊1ヵ月後の支部メルマガ配信に合わせて公開します。また、2020年度版より、PDF内の裏表紙広告とパートナーズアイは、掲載の法人協力会員のWebサイトにリンクしています。ぜひご覧ください。

編集 : 公益社団法人日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 市村宏文
 副委員長 : 中澤克秀
 委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太・長谷川理奈
 編集長 : 関本竜太
 副編集長 : 望月厚司・会田友朗
 編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・有泉絵美・青木律典・井筒悠斗・知見徹摩・立石博巳
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 289 2021 秋号
 発行日 : 令和3年9月15日
 発行人 : 大西摩弥
 発行所 : 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
 ・(公社)日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
 ・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2021

安全性を備えた快適な空間を目指して。

防滑性ビニル床シート「タキストロン NA」



防滑性ビニル床シート「タキストロン プラスケア M」
【衝撃吸収・遮熱・赤外線反射タイプ】



防滑性ビニル床シート「タキストロン グラストウェーブ AHT」



遮音・防滑性階段用床材「タキステップ 8W」



内外装用 粘着剤付き化粧フィルム「ベルビアン」
【高機能性化粧フィルム EX シリーズ】



軽量パネル止水板「フラッドセーフライト」



水廻り・屋内施設用 粘着剤付き化粧フィルム「ベルビアン」
【抗菌・抗ウイルスタイプ】

床材・化粧フィルム・防災製品など「安心」「安全」につながる製品を販売しています。



タキロンマテックス株式会社

〒108-6015 東京都港区港南 2-15-1(品川インターシティA棟)

TEL (03)5781-8150 FAX (03)5781-8130

<https://www.t-matex.co.jp>

